

第十二編 官 公 庁

甲府地方方法務局中富出張所



第一章 官 公 庁

往古の本町の所属行政官庁は、寛永一年から天和二年までの四八年間は岩間陣屋に所属し、その後三郡代官が設置されると、およそ八〇年間、上飯田または甲府代官に所属し、そして明和元年、市川陣屋が設置されてからは幕末までおよそ一〇〇年間この管下に所属したのである。

下って明治一一年一二月、「郡区町村編成法」が公布されると、従来の四郡は九郡に改正され、巨摩郡は北・中・南の三郡に、八代郡は東西二郡に分けられた。当時の経過を県史にみると

八代郡は其地勢東に起り西南に流延し、其形体狭長にして恰も帶状を為せり、而して村落は江畔に沿ひ或は山間に散在し多く山間に阻隔せらる。且つ南部に位する処、河内領と唱へ自ら一部落をなせり、旁々全郡全一し難き地形に付、之を東南二郡に分画す

この県側の原案に対して内務卿・伊藤博文から「南八代トアルハ西八代」に改めるようとの指令があり、以後西八代の郡名が確立した。郡役所は市川大門町におかれ、初代郡長に名取善十郎が任命され、同時に鯉沢町に開所（明治一二年一月二五日）された南巨摩の郡役所も兼任した。

ところがこの郡制に対し、当時の西八代、南巨摩両郡選出の県会議員から旧河内領の地理的、歴史的事情と社会的・経済的慣習を無視したものという批判が起こり、西八代郡割石峠以南、南巨摩郡大柳川以南の旧河内領をもって一郡とすると共に、郡の中央に位置する岩間または切石を郡役所所在地に仮定し、当時の出身県議・近藤喜則（南部）木内信春（南部）遠藤重道（切石）二宮貫平（共和）等により、しばしば県会で論戦が展開されたのである。

くだって明治二四年、県制施行にあたり、その前提条件として郡制問題が再燃し、四月一六日、木内信春らが中心となり旧河内領村民有志が切石に集合し、南巨摩、西八代両郡分合を協議し、河内郡の創設を鋭く県当局に迫ったが結果的には従来の郡制を一応認めたまま、郡会機関の整備とあいまっておもむろに最終結論を得ようとする妥協案によって見送りの形となり、二四年八月郡制施行、一〇月県制の実施に至ったのである。

以上のような歴史的経過の中で、西八代、南巨摩両郡の郡政の中心は北辺の市川大門、鯉沢町を中心に今日に至っている。

したがって現在ある本町の諸官庁は、ごく少数の出先機関を除いてはすべて本町対象の行政機関である。

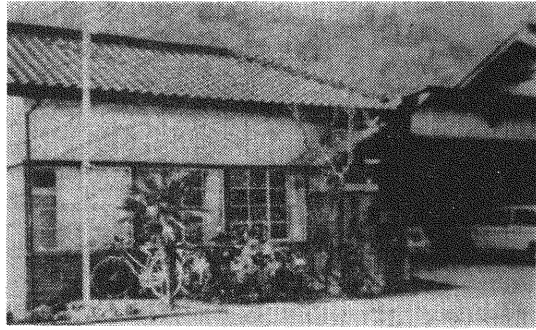
(一) 市川土木出張所西島工管区

大正七年県内務部に土木出張所が設置され、本町は鯉沢土木出張所の管下となり、大正一五年身延土木出張所が新設されるや、その管下となった。

西島工管区は、昭和二四年一月、身延土木出張所管内工管区として西島地内に設置され、その後市川土木出張所西島工管区となり、西八代郡のうち六郷町および下部町（中の倉ずい道以东の区域を除く）ならびに中富町を管轄とし、所管工事の施行、土木工事の完成検査、材料の検収、工事の施行に関し中止命令およびその除解を職務としてきた。

昭和四三年四月、出先機関の機構改革に伴い、工管区は廃止され、西八代、南巨摩両郡所管の市川土木出張所に統合されたのである。

(二) 農業改良普及事務所



旧市川土木出張所西島工管区

農業改良普及事業は、昭和三年、農業改良助長法に基づいて発足し、自主的農家を育成するため、農村の青少年に働きかけ、自主的な活動を援助し、また農業技術や経営改善指導と並行して農家生活改善をとりあげた。

本県では、農業改良主務課として、昭和三年に農業技術普及課が設けられ、同二五年、農業改良普及課と改め、同三〇年には特産課、三四年には農産課が新設され、園芸、特産主要食糧などの部門が分かれ、技術普及を主体とした改良普及課に改められ、同時に県事務所に農業改良課が設けられた。

このような沿革のなかで、昭和三年農業改良事業の第一線機関として、県下二六か所に農業技術普及事務所を設け、翌二四年には農業改良普及所と改称、また昭和三年には農業改良助長法の一部改正により、農業改良普及所を必置機関として条例で定めた。

本町には昭和三年三月、原村伊沼に原地区指導農場が設置され、同一〇月、農業改良助長法により原地区農業技術普及事務所と改められ、いずれも増穂、鯉沢、中富町を対象に事業を推進してきた。が、昭和二四年六月、原、本建両事務所が合併し、原地区農業技術普及事務所として、中富町、早川町を対象とすることになった。ついで昭和二四年九月、原地区農業改良普及所、昭和三〇年一月、原地区が中富町と合併してからは、中富農業改良普及所と改名、昭和三八年七月、機構改革により峡南農業改良普及所となるまで、伊沼地内に設置されていた。

事業内容をあげてみると、農業技術の普及として、水田関係、そ

活の計画化と健康で文化的な家庭経営改善を強力に推進するとともに、農家生活を改善し生活の向上をはかり、農業経営改善に寄与する。また一方、青少年指導においては、青少年に科学性と民主主義と自立性をもたせるため4Hクラブ活動の育成をはかるとともに、農業後継者の育成にも努力している。

歴代所長は左の通りである。

昭和二十三年 五月 原地区指導農場 四人（増穂・鯉沢・中富）

内藤清一

昭和二十三年一〇月 原地区農業技術普及事務所（増穂・鯉沢・中富）

富

昭和二十四年 六月 本建、原農業技術普及事務所 五人（中富・早川）

近藤嘉吉

昭和二十四年 九月 原地区農業改良普及所 五人（中富・早川）

昭和二十六年二月 望月忠治

昭和三十一年一月 中富農業改良普及所 六人（中富・早川）

昭和三十一年 六月 村松良道

昭和三十四年 八月 近藤嘉吉

昭和三十八年七月以降は峡南農業改良普及所として増穂に事務所を移し、昭和四十三年には南巨摩農業改良普及所と改称された。

（三）農林省山梨食糧事務所南巨摩支所中富出張所

所在地 中富町下伊沼二四番地

昭和八年一月、米穀統制法が施行され、本県に於いては直前の

六月に県庁内農務課に山梨県穀物検査所が誕生し、小麦、なたねの単式強制による県営検査が実施され、ついで昭和九年一月県外移出の米穀検査を実施し、その後昭和十二年四月、山梨県穀物検査所が独立して玄米、もみの強制検査を実施し、ついで大麦、精米についても強制検査を実施することになった。

翌一三年六月、山梨穀物検査所は山梨県農産物検査所と改められ昭和一七年二月、食糧管理法が施行され、同年二月、検査は国営となり、山梨県農産物検査所は山梨県食糧検査所と改められ、同年七月、旧原村役場に駐在員が配置された。ついで昭和二十二年二月、甲府食糧事務所が設置され、同年三月、職員が増員され、昭和二十五年五月、甲府食糧事務所は山梨食糧検査所と合併し、山梨食糧事務所と改められ、同年九月、南巨摩支所静岡出張所として六名の職員が配置され、事務所が切石におかれた。

昭和三十六年、中富町出張所と改名、昭和四〇年四月、早川出張所が併地統合され、管轄区域が中富町早川町全域となる。業務内容は米穀麦類等の買入れ、保管管理、農産物の検査、配給精米の品質調査、主要食糧の生産状況ならびに、流通の各種調査に関する事務を所管する。

（四）農業共済組合

農業共済組合は、昭和二十二年二月、農業者が不慮の事故に因って受ける損失を補てんして農業経営の安定を図り、農業生産力を発展させることを目的として農業災害補償法が公布され設置されたものであり、本町においても旧村（西島・大須成・静川・原・曙）一

組合を設立し共済事業の運用を図ってきた。

昭和三十一年四月、中富町の合併にともない共済組合も合併、旧原村役場（伊沼）に事務所を定め、中富町共済組合として再発足、昭和三十一年四月、旧共和村の宮木、下田原（一部）が下部町農業共済組合より中富町共済組合に合併され、共済事業を推進してきたが、昭和四十四年四月、事業拡大をはかると共に、広域行政に先んじて増穂町・鰺沢町・中富町の三つの共済組合を合併し、峡南農業共済組合として発足、事務所を鰺沢町内に設置、事業の運営にあつてゐる。

農業共済組合の行なう事業は次の四つが中心になっている。

1、農作物共済 2、蚕共済 3、家畜共済 4、任意（建物）共済
中富町合併当時の各組合長は（昭和三十一年四月）次のとおり。

西島村農業共済組合長	佐野 盛
大須成村	望月 満治
静川村	深沢文四郎
原村	佐野 真平
曙村	樋川 幸積
共和村	高野 要（昭和三十一年四月）
昭和三十一年四月一日中富町農業共済組合の歴代組合長	
初代 佐野 真平	二代 佐野 盛
三代 熊谷 弘毅	
四代 小林 義陳	五代 樋川 幸積
六代 神宮司 茂	

（五） 甲府法務局中富出張所

明治二十六年一〇月、庁名を鰺沢区裁判所静川出張所と称し、南巨

摩郡静川村切石西割に庁舎を設置、開庁された。

大正三年四月、庁名を甲府区裁判所静川出張所に変更、さらに大正一〇年七月、庁名を鰺沢区裁判所静川出張所に変更され業務を遂行してきた。

昭和二十二年五月官制改正により、庁名を甲府司法事務局静川出張所に改められたが、さらに昭和二十四年庁名を甲府地方事務局静川出張所に改正、昭和三十一年四月、甲府法務局中富出張所に改められた。

昭和三十七年、庁舎改築を決定し、中富・早川両町の負担により、（施行者・望月栄一）新庁舎が昭和三十八年三月落成、現在に至っている。

歴代所長は左の通り。

初代、池見源四郎	二代、保々 信作	三代、深沢 七朗
四代、福津 春吉	五代、湯本 義直	六代、飯島 嘉幸
七代、桑島 敏統	八代、松本 詮明	九代、大原 謹
一〇代、宮崎 孝知	一一代、大原 謹	一二代、佐野 実造
一三代、依田 三好	一四代、竹内 清光	一五代、内藤 事平
一六代、武井 正利	一七代、大森 昌訓	一八代、深沢 健二
一九代、橋爪 秀雄	二〇代、井上 良治	二一代、深沢 晃
二二代、大森 直美	二三代、墨田 敏雄	

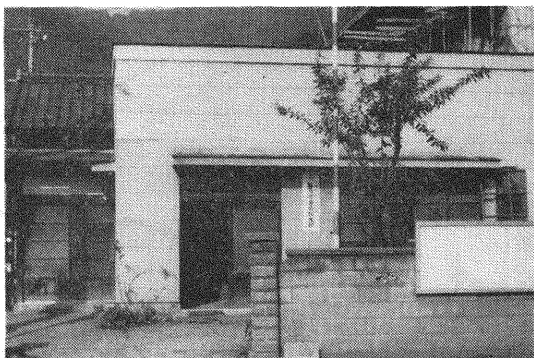
（六） 西島駐在所

西島区は、鰺沢町南方約八キロのところに位置している。

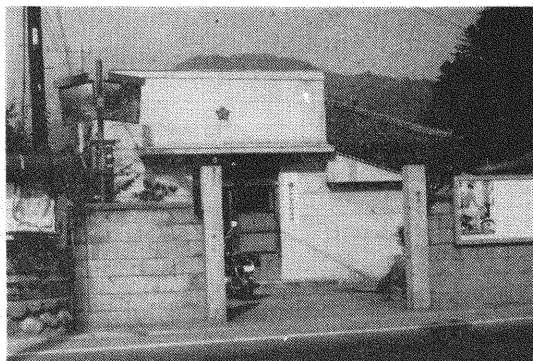
西島区は、約四百年來手すき和紙工業が発達し、さらに静岡と山

第一章 官 公 庁

梨とを結ぶ国道沿いであるため、人口が比較的密集している。そこで警察取締りおよび保安維持上の見地から、駐在所設置の必要度が生じたのである。西島は揚槍二二三番地に明治一八年八月開設し、なお大正五年改築したが、昭和二十七年二月三日、西島小学校改築のため西島村河原町七三二に仮駐在所をおき事務をとり、昭和三五九年九月一七日、西島一一五一の一に現在庁舎を落成した。竣工費六五万円、管轄は西島区と大塩区。現在の駐在所は、明治四五年より数えて五五代目にあたる。



西 島 駐 在 所



切 石 駐 在 所

富士川の船客や物資の交流が盛んになるにつれ、停船所として切石が栄えはじめた。勢い村外者が多数はいり、争いが予想される状況にあったので、村の治安援護のため明治三三年八月、切石四六三の一に設置され、昭和七年増設、昭和一二年夜警詰所として増築、昭和三八年道路工事のため本館を移転し、現在に至る。

管轄静岡地区、久成、平須、下田原。現在の駐在所は五八代目。

(四) 切石駐在所

(八) 飯富部長派出所巡査駐在所

原村は、飯富、八日市場、伊沼の三村合併時、組合立学校・役場が伊沼村原におかれていたために名付けられた村である。飯富も富士川舟運の河岸場として、また早川入り諸村を後背地として人の出入りが多く、重要犯罪の発生が多い関係上、飯富村に明治三四年部長派出所をおいた。巡査駐在所は明治四三年一月に設置されたのであるが、時代の進歩により、人口が多くなったので、昭和一五年五月に村内の中央に位置する原村伊沼六六の一番地に移転して設置された。

現在の部長派出所は昭和四三年九月二〇日、老朽庁舎として指定され改築し、原地区民の協力により、昭和四三年二月一二日に落

成した。

(九) 曙 駐 在 所

明治三十九年、中富町江尻窪に駐在所を設置、昭和七年中山に移転、昭和三五年に現在地に再度移転したものである。昭和四二年、受持区域変更により曙連絡所となった。



飯 富 部 長 派 出 所



飯 富 郵 便 局

一、郵便局

明治四年（一八七一）三月一日、日本に国営の郵便事業がはじまった。ただしそのころは、古いこよみをつかっていたので、今の太陽暦でいうと、三月一日は四月二〇日にあたる。それで四月二〇日を郵便記念日にしてある。この制度は、郵便の父といわれる前島密の努力によって生まれたもので、郵便といふなまえは明治四年までいとなまれていた民間の通信業と区別をつけるためにつけたものである。

日本の郵便局は郵便物を扱うだけではなく、郵政省が受け持っているしごと、たとえば郵便貯金や郵便がわせや簡易生命保険、郵便年金などを扱う。なおそのうえに特定郵便局のなかには、日本電信電話公社から委任されて、電信、電話のしごとまでやっているところが多い。

本町には、西島・切石・飯富・共和の各郵便局と、大塩・曙に簡易局が設置されている。

(一) 飯 富 郵 便 局

飯富郵便局は、明治三十七年三月一五日、飯富郵便取扱所として発

足し、所長に若尾市五郎（当時飯富村収入役）が任命され、郵便だけを取扱い、当時の取扱時間は午前六時から午後一〇時までであった。明治三十八年四月一日に三等郵便局（昭和十六年一月三十一日特定郵便局と改称）に昇格し、明治四十二年三月六日に集配事務、電信事務、かわせ、貯金事務の取扱いを開始、集配事務の受持区域は飯富村、伊沼村、八日市場村、曙村、五箇村であった。郵便貯金は明治八年五月、勤儉貯蓄の思想を広め質実剛健の風を涵養するという趣旨をもって創設されてから現在までに六兆円をこえる貯金高を示し、国民生活に関係深い各種事業の資金に、国の財政投融资計画に従って融資されている。飯富局関係の貯金高は、原簿保管が貯金局のために確実な額ではないが利子を含めて約三億円に達していると推定できる。

電信事務は、明治四十二年三月六日創業開始され、甲府飯富間を電信機にて送受信をおこない、回線名は甲府下山線で岩間、西島、切石、飯富局が含まれていたが、大正九年四月、甲府大野線に改定され、飯富、下山、身延局と接続していたが、モールス信号による通信方式は昭和三十七年一〇月三〇日、電話通信方式に切替えとなり、モールス音響通信は撤去された。電報配達区域は、原村・曙村・五箇村・共和村（宮木）・下山村（栗倉・大原野・小原島）・都川村・本建村・三里村・硯島村・西山村であったが、早川入り各村に郵便局が開設されるに伴い、配達区域は減少し、現在では中富町（原地区・曙地区・宮木部落）身延町（栗倉・大原野・小原島）の一部地区になっている。

電話は、公衆電話が昭和二年二月一日、取扱いが開始され、村民

の強い要望と電話設備負担金が有志によって寄付され、交換本格取扱いが、昭和五年五月二日、二八名の加入者で開設され、以後加入人数は日を追うに従って増加の一途をたどり、農村集団電話制度が創設されると共に、昭和四十二年二月一日、曙農集電話組合が、四四年三月一日に飯富農集組合が設立され、四六年二月一日に切石農集組合から飯富農集組合への収容替えがあり、現在六五九加入数となり、電話が家庭の必需品となりつつある。

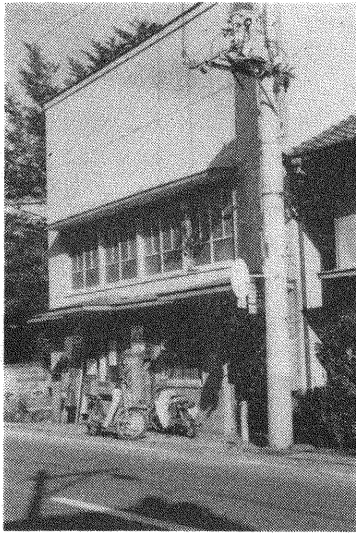
簡易生命保険は、大正五年国民の経済生活の安定と手がるに利用できる生命保険として郵便局を通じて普及され、創業以来五〇年では八兆円の契約高を突破し、郵便貯金と同じように、国の各種事業に、また地方公共団体によっておこなわれる地域住民の生活向上に活用されている。飯富局の受け持ち戸数六八三戸に対し一、九一九件と、一戸に三件の割合の契約件数であり、契約高は五億七千九百六十四万円に達している。なお、飯富局の監督下に曙、五箇簡易局の二局を受け持っている。曙簡易局は、中富町中山一六四八番地に昭和二六年三月二日受託者代表曙農集協同組合長として発足したが農協が閉鎖された昭和三〇年二月一日に受託者代表が中富町長に変更され、事務一名にて郵便貯金、振替貯金、福祉年金等の窓口事務を取り扱い、曙地区住民の唯一の金融機関として利用されている。

歴代局長 初代郵便局長は若尾市五郎で、明治三十七年三月一日郵便取扱所長を拝命、昭和十七年一月二〇日、老齢のため退官。二代目局長に、若尾一が就任、職員定員一八名の局長として活躍中である。

(二) 切石郵便局

明治七年七月一日、切石郵便取扱所として、職員五名をもって業務を開始し、明治一八年郵便局となる。本町ではもちろん県下でも最古に属する開業である。

明治三三年八月貯金事務、明治二五年七月かわせ事務、明治二九年一月外国かわせ、明治三六年一月受信業務、大正五年に簡易保険、昭和二年に電話開設、五年に電話交換業務と、科学の進歩とともに、業務内容も多種多様化されてきた。



切石郵便局

一方各地に郵便局が開局されるにつれて、配達区域も変更され、開局当時の郵便物は西島村・静川村・大須成村・伊沼村・八日市場村・飯富村・曙村で、電報は、前記の村のほかには五箇村・都川村・三里村・西山村であったが、飯富郵便局の開局された後は、西島・

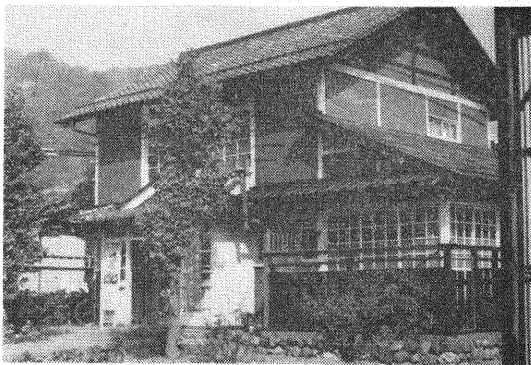
大須成・静川の三地域となり、現在に至っている。

初代局長 依田利兵衛 二代局長 依田 重範
三代〃 依田逸太郎 四代〃 依田 利通

(三) 西島郵便局

西島郵便局は、明治三六年十二月、西島郵便受取所として、西島一七二番地に設置され、明治三八年四月に西島三等郵便局となり、昭和一六年二月、特定郵便局と改称されて現在にいたっている。

開設当時の業務内容は、郵便（集配事務は取り扱わず）、小包、内国かわせ、貯金の四分野であったが、外国かわせが明治四〇年六月、電信事務が明治四二年三月、また大正九年一月電報配達業務大正一五年一月電話通話が始まり、局舎が西島一一五八番地に移転、昭和六年六月に電話交換、昭和一二年八月速達郵便業務を開始



西島郵便局

第一章 官 公 庁

した。

電報配達が始まった大正九年の電報配達区域は、鰺沢町旧五開村、中富町旧西島村、大塩であったが、昭和十五年三月旧五開村の柳川、鳥屋、十谷が配達廃止区域になり、つづいて昭和二十七年一月旧五開村箱原が廃止区域となり、現在の電報配達区域は中富町西島と大塩区である。

初代局長は笠井惟造（明治三八年四月から大正五年三月）

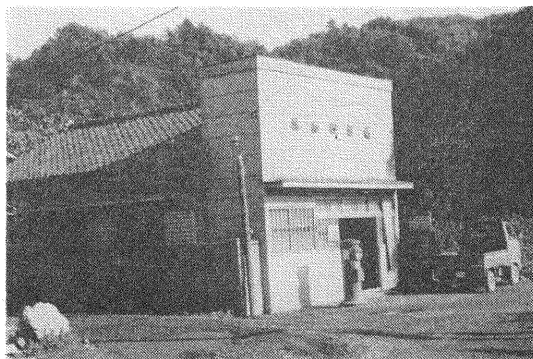
二代局長は笠井美也男（大正五年三月から昭和三年八月）

三代局長（現局長）

笠井惟彦（昭和三十三年八月から）である。

（四）共和郵便局

昭和二年八月一日
中富町下田原一六一三番地（旧西八代郡共和村）に開局された。局の取扱事務は、郵便、電話通話事務、電報受付、かわせ、貯金、保険年金であり、郵便物集配事務は取扱っていない。現在、事務員は一名で、平常、局長と



共和郵便局

二名で事務を行なっている。

初代局長・長沢秀夫

中富町総合年表

縄文文化時代

縄文前期（五千年～一万年前）○昭和三十一年一〇月、矢細工道路拡幅工事中、東山にて縄文前期土器片およそ二〇点発見

縄文中期（四、五千年前）○昭和二〇年代に松木平遺跡（伊沼）、

山田和遺跡（三ツ石）より縄文中期土器および石器発見

○昭和四四年一月、平須・原部落において縄文中期石造遺構および土器、石器発掘

○昭和四六年六月二五日、矢細工・原部落で縄文中期土器片発見

大和・奈良時代

景行天皇四〇年、日本武尊が蝦夷征討の帰路酒折宮に立ちよるとい
う（日本書紀）。また、このころ塩海宿禰はじめて甲斐の国造に
任ずると伝う（国造本紀）

和銅五年（七二二）○古事記、日本書紀に「甲斐」の地名見ゆ

天平一二年（七四〇）○甲斐の国分寺を一宮町に建立

○このころ甲斐国に四郡をおき、巨摩郡は九郷にわかれ、五開、

箱原以南の河内地方は「川合郷」と称するべき辺の地だった（和
名抄）

天平勝宝元年（七四九）○僧行基が富士川禹の瀬を開き、国内治水
に功ありと伝う（国志）

平安時代

天長三年（八二六）○四月白根山崩壊し甲斐国内洪水氾濫（水害）

貞観六年（八六四）○富士山噴火し本栖・精進・西湖に分離す

安和二年（九六九）○山城国法勝院目録に「市川荘」と甲斐国初見
の荘園名見ゆ

寛治元年（一〇八七）○新羅三郎義光甲斐守となる、甲斐源氏の祖

長治二年（一一〇五）○八日市場・大聖寺は義光公の開基と伝え、

義光の位牌と寿像を安置す（寺記）

天永元年（一一一〇）○源義清、市川青島の荘官として入国

承安元年（一一七一）○清光（義清の子）の三男加賀美遠光は高倉

天皇の時、宮中守衛の功により不動明王を賜わり、京都御所から
八日市場・大聖寺に安置す。日本最古の不動明王と伝う（寺記）

元暦二年（一一八五）○源頼朝の御家人源季貞の子宗長、逸見太郎

光長の猶子となり飯富を采邑し飯富氏を名乗る（国志）
 文治四年（一一八八）○治承四年、頼朝に従い石橋山に平家と戦った南部光行（遠光三男）南部領主となる（姓氏家系大辞典）
 建久元年（一一九〇）○建久年間、光行、頼朝の奥州征伐の軍功により奥州へ移封

鎌倉時代

建仁元年（一二〇一）○建仁年間、秋山光朝（遠光の長男）の二男・下山小太郎光重が下山荘を治領す
 建暦三年（一二二三）○鎌倉幕府御家人伊賀次郎兵衛尉、岩間荘を治領す（吾妻鏡）
 文永二年（一二七四）○六月一日、地頭波木井実長の招きで日蓮、身延草庵にはいる（身延山御書類聚）
 弘安四年（一二八二）○波木井実長、日蓮のため久遠寺を建立
 弘安五年（一二八二）○一月一日、日蓮池上の宗仲の邸に入滅
 徳治元年（一三〇六）○平須妙光寺、実藏坊日誦大徳開山
 嘉暦元年（一三二六）○この年、大塩・薬王寺改宗開山（寺記）
 嘉暦二年（一三二七）○この年、大塩・法永寺改宗開山（寺記）

室町時代

康暦二年（一三八〇）○この年より至徳二年二月まで五か年の歳月を費し、本町夜子沢・曹溪庵（廃寺）にて僧聡彦大般若経六百

巻を書写し、後に武田軍が武運長久祈願のため戦陣へ携行する。
 現在下山・南松院に現蔵

永享元年（一四二九）○この年、大塩・仙応寺開山
 宝徳二年（一四五〇）○穴山信介、河内地方に進出し下山に居館をおく（穴山系図）

康正元年（一四五五）○この年、中山・宝珠院開基の穴山初代兵部少輔の三男、法名宝珠院殿慶寿余公居士入寂（寺記）

文明年中（一四六九）○このころ遅沢・千光庵開山（寺記）

延徳元年（一四八九）○この年、平須・長遠寺三八代勧学阿闍梨身延山十一世日朝聖人に値遇し帰伏改宗、寛永十三年本堂再興、開祖は正暦年中（九九〇～九四）良照阿闍梨にて大雲山竜昭寺（真言宗）と称していた

大永元年（一五二一）○駿河の今川勢一万五千（総大将福島正成）河内路に討入る。六〇余日の激戦の末、武田勢（信虎）撃退

天文元年（一五三二）○この年、切石・善妙寺、一八代善妙阿闍梨日受上人により真言宗から改宗開山

天文三年（一五三四）○一月一日、西島・青原院開基（寺記）

天文四年（一五三五）○六月、信虎駿河（今川氏輝）に出兵、八月国境万沢で合戦。河内路各所ののろし台跡もこのころからおかれたと伝う

天文一六年（一五四七）○四月、武田信玄身延山参詣

天文一九年（一五五〇）○一月、今川義元の女、武田義信（信玄の長男）に嫁ぎ、駿府から河内路を上り甲府入りする（甲陽日記）

永祿六年（一五六三）○この年、宮木・円通寺開山、開基は文龜元年（一五〇一）依田出雲守（寺記）

永祿二年（一五六八）○信玄、駿河の今川氏真攻略のため一二月六日甲府発、河内路を下り駿河に進攻し、駿府を占領

元龜二年（一五七一）○西島・楠甫・箱原三か村組合船頭屋敷を以て官営の兩越の渡し始まる（西島文書）

○西島の望月清兵衛、信玄に御料紙を献納し「西未朱印」を賜わると伝う（国志）

元龜四年（一五七三）○四月二日、信玄入寂

天正元年（一五七三）○室町幕府亡ぶ。この年西島・広禅寺起立、

開山は寛永一〇（一六三三）年入寂の天室和尚（寺記）

天正二年（一五七四）○正月一日、信君花押の下山村伝馬免許状あり（下山・芦沢文書）当時河内路の伝馬は下山から岩間へ継送

天正三年（一五七五）○穴山信君、武田属城の一つ駿河江尻城主となる。駿州往還の整備すすむ

天正五年（一五七七）○この年、岩間村の伝馬公役困窮につき市川までとする武田印判状あり（寺沢・河西義一文書）

天正一〇年（一五八二）○三月、勝頼攻略のため、家康、穴山勢と駿河より討ち入る（三月三日付家康禁制写、大聖寺藏）

○穴山信君、信長（安土城）に招かれた帰路、山城国宇治・田原で殺害さる

○信長、本能寺の変に倒れるや、甲斐国城代川尻鎮吉、暴政を怨まれ六月岩窪の地で州民に攻殺さる

○六月、北条氏政甲斐国に侵入、徳川の家臣・大須賀五郎左衛門康

高これを迎え討つため河内路より入国、七月これを敗退せしむ。
○この時、岡部次郎右衛門、家康の命により本町寺沢にとりでを新築し、菅沼定政これを守衛す（国志）

安土・桃山時代

天正一五年（一五八七）○穴山勝千代早世し穴山家断絶、これより

菅沼定政、切石にて東西河内領九千石を治領（国志）

天正一七年（一五八九）○夜子沢・宝泉寺開山の南浦宗岳和尚入寂

天正一八年（一五九〇）○菅沼定政の率いる河内二一郷士、小田原の役に出陣

○この戦功により総州相馬郡守谷藩一万石の城主に転封（国志）

○甲州は豊臣秀勝の領国となる

天正一九年（一五九一）○三月、加藤光泰領国、文禄二年まで

文禄二年（一五九三）○一月、浅野長政領国、翌年まで

文禄四年（一五九五）○一月、西島・円明寺開山（寺記）

慶長二年（一五九七）○矢細工・福寿院開山の了太永悟和尚入寂、

開闢は弘治元（一五五五）年（寺記）

慶長七年（一六〇二）○菅沼城を取壊すと伝う（国志）

江戸時代

慶長八年（一六〇三）○正月、徳川義直領国、四奉行に施政をゆだねる。本町大聖寺にこの時の四奉行寺領改め証文現蔵す

慶長九年（一六〇四）○四奉行の印書に、鰍沢、黒沢の口留番所の通過に際し御会式の身延参詣の男女の路銭、木綿は五端六端、糸は十つれ十五つれ、米は五升六升に限り役儀あらため無用候べき者なりと。昔は往来役銭ありしを知る

慶長一〇年（一六〇五）○八日市場に伝馬宿おかれる（村方文書）

慶長一一年（一六〇六）○宮木・耕雲寺開闢、開山は可天和尚

慶長一二年（一六〇七）○三月、角倉了以富士川を開さくし高瀬舟を通ず。また慶長一七年開さくとも伝う（国志）

慶長一九年（一六一四）○三月、富士川再度浚渫を家康了以に命ず。了以病患にてその子与一代つて工事成る

○七月、了以卒す。年六一歳（富士川舟運史）

元和二年（一六一六）○九月二日、徳川忠長領国となる

寛永二年（一六二五）○忠長、甲駿遠三国を領し、甲州御城米を清水港に回送す（舟運史）

寛永四年（一六二七）○万沢に口留番所、十島に船番所をおく

寛永九年（一六三二）○一月、当国の御廻米を浅草御米蔵まで回送

寛永一一年（一六三四）○岩間に御陣屋設置、天和二年まで四八年

寛永一四年（一六三七）○切石伝馬宿が八日市場から独立し、組合宿場として一月を切半して継送（切石・寺沢文書）

寛永一五年（一六三八）○青柳河岸に御米蔵建つ（舟運史）

正保三年（一六四六）○古長谷・常岳寺開山、開闢は元龜二年

正保四年（一六四七）○六月一七日、大塩寺開山の太鷹寒撮和尚入寂、開基は文祿二（一五九三）年（寺記）

明暦二年（一六五六）○二月、下田原・盛安寺開山の太岐九道和尚入寂、開基は慶長一（一六〇六）年（寺記）

○伊沼・東泉寺同じく九道和尚開山、開基天正二（一五七四）年

寛文元年（一六六一）○一月、代官寺西直次郎、甲府代官に場所替え助郷三百人の大通行、岩間村助郷差出拒否のため切石、八日市場宿と出入（寺沢文書）

寛文六年（一六六六）○代官・兩宮重兵衛の命により箱原・西島間の西岸に新道切り通しなる（西島文書）

寛文九年（一六六九）○切石・正伝寺、旧寺曹洞宗この年正運坊日政大徳により日蓮宗に改宗開山（寺記）

○この年、祐慶法意の本願により身延参詣客の便のため、国中千人の淨財五〇両で早川渡船始まる（飯富文書）

寛文一一年（一六七二）○七、八月、本町富士川西岸諸村の総検地行なわれ江戸時代の村高確定（各旧村検地帳）

延宝二年（一六七四）○二、三月、国中大飢饉で飢死者多数

延宝五年（一六七七）○久成・円妙寺開山（寺記）

○堂平太心坊、文明年中（一四六九）よりの地藏堂破壊のためこの年、中興開基（寺記）

○この年、西島手すき和紙製産高、大延二千枚、上糊入二千四百枚、中糊入二千四百十枚下糊入三千枚、計九千八百十枚

延宝六年（一六七八）○本町富士川東岸、宮木・下田原の総検地延宝七年（一六七九）○二月、宮木・常楽寺開山の申国和尚入寂、

開闢は慶長年中（寺記）
○二月、江尻窪・日輪寺開山の為、由国和尚入寂、開闢は応永三

四(一四二七)年(寺記)

延宝八年(一六八〇) ○この年、天災地変相つぎ国中大荒れという

天和二年(一六八二) ○この年、疫病大流行出水(水害)

○九月、宮本・如意庵開山の道天和尚入寂、開基は慶長八年

○この年、岩間村陣屋廃止、同じく岩間伝馬宿廃止(県史)

貞享元年(一六八四) ○九月、下田原・向旭院開山の梅翁和尚入寂

○貞享年中、箱原・西島間西崖に徒行路開く(国志)

元禄二年(一六八九) ○正月一日、中山・宝珠院焼失(寺記)

○二月一日、万沢口留番所、関所となる

元禄七年(一六九四) ○一月、甲府から江戸に三度飛脚の便開く

○七月二〇日、飯富村新田畑改め、検地役人遠藤次郎右衛門

元禄九年(一六九六) ○八日市場大聖寺不動尊江戸に出開帳。この

時桂昌院御参詣、現当両益の祈願崇敬篤く、黄金百両、錦旗二流

御紋入提灯寄付さる(寺記)

元禄十一年(一六九八) ○八月、飯富村新田畑改め、検地役人遠藤

次郎右衛門(飯富村検地帳)

元禄十三年(一七〇〇) ○寺沢・明沢寺、長禄年中(一四五七)よ

りの七面明神堂破壊に及び、この年中興開基(寺記)

元禄十五年(一七〇二) ○飯富村新田畑改め、遠藤次郎右衛門、こ

のころ飯富村の新田畑が道外にのびる

宝永四年(一七〇七) ○一〇月四日より十一月一二日まで日々大地

震

○十一月二三日より二九日まで富士山大噴火

宝永八年(一七一二) ○大聖寺不動尊江戸出開帳(大聖寺文書)

享保元年(一七一六) ○甲斐の駅路を甲州道中と称し、五街道の一
つに加える(国志)

○享保年中、飯富村・古屋弥次右衛門私費を投じて富士川舟路改
修、および笹子峠、鶴瀬、勝沼の横道の開さくを行ない功彰さる

享保九年(一七二四) ○三月、柳沢領から幕府直轄領となる

○切石、手沢沢河岸から發送の御廻米を八日市場津出場から集荷
發送するようになる(幡野力文書)

○四月、甲府・石和・上飯田・都留に代官所を置く。本町は上飯
田または甲府代官に所属する(村方文書)

○七月四日、甲府勤番を置く(国志)

○享保九、一〇兩年大干害、切石伝馬三六匹が九匹に減る。切石
・寺沢村伝馬維持のため小判百五両の拝借金を請願(寺沢文書)

享保二〇年(一七三五) ○飯富に御材木置場(本真)を置き、早川

流木の筏乗り方より甲金六分ずつ徴収(享保二〇・飯富明細帳)

寛保三年(一七四三) ○切石伝馬宿の定助郷寺沢村、この年より別

に問屋場を仕立て、月の上半期を切石と切半継送(村方文書)

宝暦六年(一七五六) ○西島の長右衛門なる者、大塩村と甲銀三〇

両の年契約で北沢地内のみようばん採掘(大塩文書)

宝暦一〇年(一七六〇) ○西島村の力者二六戸、人数男四四、女五

〇、計九四人、力者部落に住む(差出帳)

明和元年(一七六四) ○駿府紺屋町陣屋出張所として市川陣屋置く

明和二年(一七六五) この年市川陣屋建つ。初代代官小田切新五郎

明和四年(一七六七) ○八月二日、山県大弐江戸に処刑。四三歳

安永三年(一七七四) ○西河内領で連上紙を納める村、西島村、箱

原村、鳥屋村、平須村、本郷村、楮根村、南部村、福土村の八か村（西島・御運上紙目録）

○西島手すき紙生産高、下糊入一、六七二、四〇〇枚、下下糊入四四四、〇四〇枚、旦紙二九、四〇〇枚（西島文書）

安永六年（一七七七）○正月二八日、六月二八日の年二回、大聖寺不動尊の縁日に祭り市が立つ（八日市場明細帳）

安永七年（一七七八）○大聖寺不動尊江戸出開帳（大聖寺文書）
天明六年（一七八六）○夏中より雨天続き諸国大満水、凶作米穀高値、飢死者続出、河内領諸村代官所へ御救米請願（夜子沢文書）

寛政四年（一七九二）○早川入往還の岩坂、同所続き棚道一七間、人足一〇一人、定式御普請（中山文書）

寛政七年（一七九五）○市川陣屋、本陣屋となる。本町旧村もこのときから市川代官所の所属にはいる

文化五年（一八〇八）○朝鮮信使対馬に来聘に付き、国役として各村村高百石に付き金一両宛五か年賦で納付（大塩文書）

文化一一年（一八一四）○甲府勤番支配松平定能、文化三年起稿の甲斐国志百二十三巻が完成する

文化一三年（一八一六）○八月、鴨狩津向村・西島の間新渡船開始せるも桶甫、箱原、西島村船屋敷所持の船頭より故障あり取り止めとなる。（県史）

文化一四年（一八一七）○二月、富士川天神淵玄石、難船除け工事成る。工事世話人、初鹿島村望月勝右衛門、棟梁、国見平の石工栄蔵（鯉沢七面堂絵馬）

文政元年（一八一八）○二月二日夜、切石・中宿より出火、類焼

一四戸、被災者七五名（切石文書）
文政四年（一八二二）○二月一日、西島村大火、若宮八幡社、広禪寺など村の大半焼失（西島文書）

文政一一年（一八二八）○夜子沢村農、望月弥宗兵衛寺小屋（環翠堂）始む。生徒男三〇、女〇、学習年限七年

○天野覃、明和四年切石天野家に生まれ、寛政一一年、甲府医学所方講師となる。この年六二歳で没す（甲斐志料集成）

文政一二年（一八二九）○三月、飯富村大半焼失（飯富文書）
○早川入往還の間遠峠、尾和首に棚道、投渡橋の定式御普請（中山文書）

天保三年（一八三二）○二月、大塩村北沢山論出入、西島、手打沢村江戸御老中へ駕籠訴（手打沢文書）

天保四年（一八三三）○この年大飢饉、本町各村飢人続出

天保七年（一八三六）○この年打続き大飢饉、甲州一揆おこる。本町江尻窪大工職周吉（二一歳）一揆の頭取りとなり指揮、翌年大塩平八郎の乱と共に三〇年後の明治維新の夜明けを告げる

天保八年（一八三七）○二月、宮木・円通寺焼失（寺記）
○早川入往還間遠峠・堰口・間遠沢・尾和首定式御普請（中山）

天保一一年（一八四〇）○切石村医伴^{はなづか}、寺小屋（学而堂）開く。生徒男六三、女一四、明治五年廃止、年限八年

○六月、大塩村北沢山論^{でいり}出入、再度西島、手打沢両村江戸奉行所へ駕籠訴（手打沢文書）

天保一二年（一八四一）○大聖寺不動尊江戸出開帳（大聖寺文書）

天保一四年（一八四三）○大塩村、産物売出し品として大豆、小豆

櫓、みつまた国々へ売りさばく（大塩村明細帳）

弘化二年（一八四五）○八日市場村医、樋川道英寺小屋（博愛堂）

開く。生徒男二〇、女〇、学習年限およそ八年、明治五年廃止

嘉永元年（一八四八）○この年二月より八日市場村のうち大子山部落にも年番名主がおかれ、宿通り設立の出張所で伝馬事務をつかさどる（寺沢・河西文書）

嘉永二年（一八四九）○中山・矢細工村間の用水出入、矢細工は飲用水として秋、彼岸明けから春、八十八夜までの堰水使用で内済（中山文書）

嘉永五年（一八五二）○西島、岩崎の用水路御普請、工事請負者浅尾新田・伴右衛門、掘抜き穴五尺四方一間、掛樋崖長さ二八間、高さ三尺、横三尺、総工費四百兩と銀二百二兩、人工延べおよそ六千人（西島文書）

嘉永六年（一八五三）○西島村医荒川湊、寺小屋（立道舎）開く。

生徒男四〇、女一〇、明治五年廃業、年限六か年

安政元年（一八五四）○一月四日、大地震、古長谷常岳寺崩潰、

平須村崩壊家屋一五戸、^{ひさが}日下り道、早川入往還等大破大崩落

安政二年（一八五五）○二月二十九日、西島村岡町より出火、青原院、栄宝寺、天神社ほか類焼五六軒（西島文書）

○五月、切石・下宿大火、類焼一戸（切石文書）

○二月、江尻窪・梨子・福原・遅沢の組合村が独立。従来の江尻窪村兼帯名主を廃し各村に名主を置く（江尻窪文書）

安政三年（一八五六）○切石村医・依田正俊（杏林堂）寺小屋始む。生徒男二〇、女二、年限およそ七年、慶応三年廃止

○西島の岩崎用水路再び御普請、時の名主嘉右衛門、総工費甲銀五百五十九兩永二百文、人足八千人（西島文書）

安政四年（一八五七）○飯富村・早川貞哉、寺小屋（尚文堂）開く

男三〇、女三、明治四年三月廃業

安政五年（一八五八）○市川代官、備中倉敷より御場所替大通行に際し岩間村は市川代官所からの直接触当てなきを理由に助郷を拒否し八日市場、切石宿より出訴（寺沢文書）

安政六年（一八五九）○四月、切石・中宿より出火、類焼三三戸、被災者一八四人（切石文書）

文久元年（一八六一）○一月、和宮内親王降嫁のため中山道より

江戸城入り。この助郷として沓掛（軽井沢）へ本町各村から出役

○この年戸坂・岩崎両渡船官費を以て造り替え（県史）

元治元年（一八六四）○江戸城修理用材として早川流木を筏で送る

慶応元年（一八六五）○徳川家茂長州征伐進発の加助郷として下田

原、宮木村等五か村正人足一四三人、買上人足代八兩で東海道吉原宿へ助郷出役（宮木文書）

○同じく西河内領遅沢村ほか四二か村から東海道奥津宿へ出役

慶応三年（一八六七）○この年切石村余業稼ぎとして、質屋五、水車三、醬油二、紺屋二、川下げ大豆・塩商三、衣商七、鍛冶工三木工六、左官一、屋根職一、菓子屋二、髪結床一（余業稼書上）

明治時代

明治元年（一八六八）○三月五日、東山道総督参謀板垣退助の軍、

甲府城占領（県史）

○東海道総督海江田武次命をうけて国事を代理（本県立庁の始め）
○五月、市川・石和・甲府三代官を改め三部県知事をおき鎮撫府が直轄す（県史）

○七月一八日暴雨、西島畑反別一町歩余石砂泥入損地（県史）

○一〇月、鎮撫府を廃して甲斐府をおく

明治二年（一八六九）○一月二〇日、関所廃止

○一月二六日、箱原および楠南・西島両村にかかる富士川馬渡船二そう官費にて新造替、長六間五尺、横五尺四寸、高二尺
右入用、樅木三本（釜額村より搬出人足三六〇人、此米二石七斗）船造り大工三五人はか手伝人足八八人（県史）

○七月、甲斐府を廃し甲府県に改む（県史）

○この年、富士川舟運による甲州四郡食塩一二万俵、信濃（諏訪佐久・小県・伊奈・筑摩）五郡食塩一三万俵計二五万俵、ただし平均一俵価格およそ一両（県史）

○この年、市川、西島、東西河内領諸村紙すき立て高、紙四千駄（一駄四〇貫）代金五万六千両、一駄の平均値段一四兩

○一月、五か年季で中山、江尻窪、梨子三村米一石四斗一升三合で早川往還定式御普請（県史）

○二月、西島村大火、類焼一六戸（県史）

明治三年（一八七〇）○二月二日夜切石・中宿大火、類焼一〇戸

○二月二日、矢細工大火、類焼一〇戸（県史）

○三月八日、西島村大火、類焼八戸（県史）

○七月中旬より連雨、西島村の堤防決壊、延長一五八間九か所、

飯富村の石積切所延長四八間五か所、手打沢川通り堤切所長さ一〇間（県史）

○八月八日、鴨狩津向地先富士川渡船の儀、西島村および西八代郡鴨狩津向以下一六か村市川支庁に陳情、本庁より許可、九月二日より渡船開始す。陳情理由、川東一六か村は切石・八日市場両宿の助郷出役の近道として文化一三年以来請願のところ両越渡し船頭屋敷の故障で実現できなかった。西島も楮、三極、薪炭および田肥に至るまで川東諸村より買入れており、両者便益のため請願していたもの（県史）

○九月八日、暴風雨、宮木村潰家五軒、下田原三軒、久成村潰家三軒、半潰家一軒（県史）

○一〇月、富士川舟運に倉敷県より西洋形帆船前船を二万七千六百両で買上げたが使用不便につき廃止（県史）

明治四年（一八七一）○二月、種痘局を甲府共立病院に設置、三月出張所を三郡に置く。巨摩郡は切石、南部二か所（県史）

○七月、廢藩置県、一月、甲府県を廃し山梨県とし、土肥実匡県令となる（県史）

○二月、甲府柳町に郵便取扱所設置、人力車初めて甲府に入る

明治五年（一八七二）○一月一八日、県下四郡を九大区に分け、さらに八〇の小区に分ける。本町は巨摩郡第三一区に西島、大塩、久成、平須、巨摩郡第三二区にその他の川西旧村、八代郡第一五区に共和村旧村所属（県史）

○毎年一〇月より翌年三月まで、西河内領各村の分担金で、江戸

時代以来慣行の飯富・下山両村が早川仮橋架橋（早川橋示談書）

○一月二日、古長谷村大火、常楽寺、八幡社など類焼一二戸

○鯀沢・青柳・黒沢三河岸より岩淵まで水路一八里の下船、乗合一人銅貨七錢八厘、右の高瀬舟一そう船頭四人掛り、人員一六人乗り、一そう分賃限船賃一円二五錢（県史）

○五月、早川河原大縄場五町七反（二町八反六畝は遅沢村請、二町八反四畝は飯富村請）の新開、当時の第三二区副区長、切石・矢崎圭蔵の功績を記念して矢崎新田と呼称、現在流失し地名のみ
○八月、大小^{だしやうち}騒動県内一円に起こる。東西河内領は二〇日、西は切石、西島に集結し鯀沢口留番所へ、東は岩間村へ集結黒沢番所へ、それより一手になって国中勢と合流県庁に迫るべく行動開始するも、両番所に待ちうけた出張県官説諭に請願書受理を条件に鎮静さる（県史）

○万沢関所廃止（県史）

○五月、伝馬宿制を廃し、切石駅・八日市場駅に陸運会社設立（寺沢・河西文書）

○七月、駿州往還陸運会社、鯀沢駅、切石駅、八日市場駅、下山駅、相又駅、南部駅、万沢駅の七駅に設立（県史）

○八月、学制発布、九月、切石郷校善妙寺にて発足、開校者伴図

○大須成区、啓蒙学校を解散して切石郷校分校となる（沿革誌）

○一〇月二五日、名主、長百姓制を廃し、各村に正副戸長制をし

く
○この年「切石村職分統計」医術二、農男六五、女一〇七、工男四〇、商男二二、女九、雑業男三、計二四八人

明治六年（一八七三）○一月、藤村紫朗二代県令となる

○一月徴兵令布告、血税一揆諸国に起こる

○四月一八日、結髪^{けつぱ}の費を節し学校設立の資に充當すべく県令より示達（県史）

○四月、市町村伍組編成法ならびに戸・区長公選法公布（県史）

○七月二日午后二時、矢細工村大火、類焼共居宅七軒土蔵一か所

○八月二八日午后二時、江尻窪村大火、類焼共居宅三九軒、寺一宇

○九月五日、切石学校創立、善妙寺仮校舎、首座教員伴図は二人、学校所属町村、切石・手打沢・八日市場・伊沼・飯富・寺沢・夜子沢、学区取締人・矢崎圭蔵（県史）

○切石学校、善妙寺庭の一部を買収し洋風本館二階建竣工、教室四室（沿革誌）

○一〇月一四日、切石学校古長谷分校、星野勝左衛門宅仮校舎

○一月一八日、前四時、西島村大火、類焼共居宅六軒（県史）

○切石、八日市場、下山、相又、身延、南部、万沢駅にそれぞれ宿駕籠^{かじ}三抱の鑑札許可（切石文書）

○二月四日、西島学校創立、円明寺を仮校舎とし、水戸藩浪士・川上凌訓導試補となる（沿革誌）

○鯀沢警察署設置（県史）

○二月、早川町保村金山開坑採掘許可（県史）

明治七年（一八七四）○一月二五日、富士川運輸会社設立について内務卿より認可、人員乗船場所を三河岸および切石駅、大野村、南部駅、十島村に限定する（県史）

○三月二日午前一時、切石・中宿より出火、類焼一五戸、土蔵

一か所、同屋根一か所、被災者七二人（切石文書）

○二月一五日、富士川舟路便益のため岩淵・蒲原間三〇町に新水路開さく。これにより駄馬輸送の不便解消す（県史）

○五月一二日、田原学校（上田原、下田原、宮木、一色）新築開業するを以て山梨県より功労者表彰を受く者次の通り

下田原副区長・若林直次郎（学区取締）、戸長・長沢平左衛門、

同・若林丈左衛門、宮木村戸長・小林市右衛門、副戸長・若林義重、同・村松万右衛門（県史）

○五月一二日、駿州往還鰍沢駅、八日市場駅、相又駅、南部駅、万沢駅の五か所に郵便取扱所設置（甲府局誌）

○七月一日、小井川駅、切石駅、下山駅に郵便取扱所設置、切石郵便取扱所の区域は、西島、大塩、平須、久成、切石、夜子沢、寺沢、日向南沢、手打沢（甲府局誌）

○九月、雨畑^{あま}字長阪山宮地産出硯石、稼人八人、産出一か年八千貫目（県史）

○一〇月一八日、従前の陸運会社を解散し、一二月五日、通運会社と改称する。切石駅継立引受人依田常兵衛、合併依田利兵衛、馬三匹、人足一〇人、八日市場駅継立引受人天野昶右衛門、馬三匹、人足一〇人（県史）

○この年、各村に学校世話掛り設置、翌八年学校事務掛りと改称

○一二月三日、飯富学校開校（寺院仮校舎）、飯富、伊沼村児童就学、学区取締・矢崎圭蔵（県史）

明治八年（一八七五）○一月、身延山久遠寺焼失

○二月一日、鰍沢村第一番地に富士川運輸会社設立（県史）

○四月二三日、大須成村誕生（大塩・平須・久成村合併）

○六月三〇日、共和村誕生（宮木・下田原・上田原・一色合併）

○八月一日、切石郵便取扱所が切石郵便局に昇格（甲府局誌）

○九月一三日、駿州往還五開村より西島村までの新道切開工事、巨摩郡第三区、三二区長より陳情、着工許可（切石文書）

○この年、切石運輸分社、株主組織を以て荷物取扱い始む

明治九年（一八七六）○二月一一日、富士川運輸会社飯富分社古屋平十郎、切石分社天野新太郎、下田原分社若林市造（県史）

○一〇月三日、区画改正、県下全管区を三四区に分け、本町川西諸村は巨摩郡第一六区、川東諸村は八代郡第二〇区に所属

○一〇月一三日、早損村―共和村の内、上田原、下田原、一色、および手打沢村（県史）

○明治八年九月着工の五開・西島間駿州街道新道がこの年一二月竣工、開削長さ一、九〇一間、道幅二間（旧道六尺幅）（県史）

明治一〇年（一八七七）○都川（保）まで早川舟運による通航開始

○一月三一日、本県初の第一期県議員選挙、区長三四名、同数の公選議員三四名、計六八名定員、本町出身の県会議員次の通り

区長議員・遠藤重道（切石）、二宮貫平（共和）、公選議員・天野広吉（切石）（六十年誌・県議会史）

○五月、昨秋九月の大洪水にて早川尻の変瀬により一度開破した岩石水上に現われ危篤を覚え切破、此の岩坪四〇坪、賃金六五円

請負人鰍沢村雨宮忠七・石坂文蔵（県史）

○一〇月、切石、夜子沢、寺沢村聯合役場仮事務所を切石・正伝寺本堂内におく（寺沢・河西文書）

○一〇月二八日、田原学校新築（県史）

○二月八日、大塩学校創立（これまで大塩寺を仮校舎）

○東京に於いて内国勸業博覧会開催、本町関係出品として共和村産青石一塊、曙村うるし一びん五〇匁（県史）

明治十一年（一八七八）○切石より静岡県安倍郡田代村へ達する伊奈街道開さく願を第一六区（本町各村）第一七区（早川町諸村）より藤村県令へ請願

○六月一四日、曙学校新築し切石学校分校から独立開業、第十六区長兼学区取締遠藤重道、戸長樋川吉之、新築世話係星野新之次、深松弥藤太、佐野章三郎、望月忠義、樋川徳左衛門、加賀美剛右衛門、望月源四郎（県史）

○九月一日、同一四日夜から一五日まで強雨出水、八日市場富士川堤欠壊長さ六〇間、西島村、富士川支川、谷川堤所数か所切入、手打沢川堤切所長一六間、切石村駿州街道筋山崩長九四間、同八日市場村道路欠所長四一間、大橋一か所落橋、飯富村同土橋二か所落橋（県史）

明治十二年（一八七九）○一月一日、町村に書役を置く（県史）

○一月二五日、南巨摩郡役所開所（県史）

○二月一日、従来の西島用水路（富士川通り堤添い）出水のため被害を受けるため用水路の転開を申請（県史）

○二月、本県初の公選県会。本郡当選議員、近藤喜則（南部）木内信春（南部）遠藤聡知（鰍沢）遠藤重道（切石）（六十年誌）

○二月一三日、伊沼村・佐野万右衛門、山梨県より孝子褒賞、五

〇銭下賜（県史）

○三月、駿州往還鰍沢村より飯富村に至る道路修繕格別尽力せる者に賞金遣わさるうち本町関係者、（切石）遠藤重道、矢崎圭藏、天野義守、依田常兵衛、依田美治、天野新太郎、（西島）佐野唯兵衛、笠井広敬、佐野甚左衛門、同勝太郎、（寺沢）河西幸昌、渡辺福堅、佐野貞房、深沢政右衛門、（八日市場）望月真兵衛、山下重義、小林吉照、若尾良右衛門、（大須成）松田良左衛門、大森宗孝、佐野太郎左衛門、深沢万吉、神宮寺久左衛門、依田定八、地場源次郎、（飯富）平林貴保、望月裕春、井上養清、（伊沼）佐野文吉、深沢寅之丈、（夜子沢）望月貞利、川口信平、川口政武、川口磯右衛門、（手打沢）望月長三郎、深沢治郎左衛門、同重兵衛、依田元平、（曙）樋川吉之、望月万平（県史）

○この年八月、寺沢・切石・夜子沢組合村に手打沢加わり四か村組合村となる（村政要覧）

一〇月、県下にコレラ病まんえん、南巨摩郡下患者一四名、死亡者七名（県史）

○二月現在、三河岸船数、鰍沢二六八そう、黒沢一一八そう、青柳七八そう、計四六四そう（県治総覧）

明治十三年（一八八〇）○六月、第一回半数改選、本郡関係議員、磯野忠博、天野義守（切石）、木内信春（留任）

○二月、大塩学校校舎焼失、仙応寺を仮校舎にあてて

○この年、区町村会法公布、町村民公選の町村会生る

明治十四年（一八八一）○五月、小学校教則綱領発布、普通小学校を分ちて甲科乙科とし各科を八級に別かつ

○六月、駿州清水港に博運会社開業し、富士川運輸会社と競争

○早川町草塩に郵便取扱所設置、切石郵便局から集配（甲府局誌）

○この年、学校事務掛を廃し学務委員を置く

明治一五年（一八八二）○この年、小学校教則改正、小学校を初等中等、高等に分ち、各等を五級に分かつ

○この年、三河岸船数、鰍沢五五七艘、青柳二二艘、黒沢九四艘、計六七三艘、富士川上り運賃、蒲原より鰍沢まで食塩二〇俵積み一二円五〇銭

○二月、第二回県会半数改選、本郡関係議員、木内信春、望月五兵衛（留任）、磯野忠博、天野義守（切石）、二宮貫平（補欠）

明治一六年（一八八三）○切石に殖産会社設立（県史）

○この年町村役場を廃し、連合戸長役場設置、西島・大須成連合戸長役場（西島）、曙・五箇村連合戸長役場（梨子）を置く

明治一八年（一八八五）○二月、第三回県会半数改選、二宮貫平（共和）当選

○この年ころより富士川通船に帆力を利用し始む（県史）

○この年、間遠新道開さく、合計四〇二坪、人足延べ三、八二二人（中山文書）

○八月、西島駐在所開設

明治一九年（一八八六）○七月一日、県令を知事と改む

○この年ごろより富士川曳ぎ舟に帆を試み、蒲原・鰍沢間の遡行四日を三日または二日半にて達するを得る（富士川調査書）

○この年、富士川難破船一三艘、一八八二艘、一七七一艘、一六四四艘（県統計書）

○明治中期、西島・笠井致敬活版工場を設置し印刷に従事

明治二〇年（一八八七）○早川町湯島に郵便取扱所開設、切石から都川を経て湯島に至る郵便路線確立（甲府局誌）

○この年南巨摩郡、馬車一〇、人力車二三、荷車四八二（統計）

○この年、鰍沢河岸出船一四、四二〇艘、入船一一、九一五艘と盛況（県統計書）

○このころ本町開業温泉、西島の湯（北沢温泉）温度五四、主治皮膚病、慢性潰瘍、曙温泉（遅沢）主治慢性慢性腰麻質斯、慢性胃カタル、陰尿道カタル、皮膚病（同右）

○この年南巨摩郡下職人および雇人賃金、日当で大工・左官・建具二〇銭、石工・屋根職一八銭、製糸工女一一銭、紙すき一六銭酒造一五銭（同右）

○この年、切石・天野延太郎製糸工場、人力、職工一〇、雇人一資本金四二〇円、営業収入金一一九二円、営業支出金一一二一円ほか郡下に増穂（長沢紋治郎）職工六四、鰍沢（雨宮実蔵）職工三八、富河（山口静）水力、職工六〇、雇人四八（同右）

○この年南巨摩郡下茶園反別四三町四反、製茶産額九七〇貫、西八代一〇町八反、一八六〇貫（同右）

○この年、日用品平均相場（鰍沢）精米二石六円一五銭、醬油一石一五円、味噌一貫目二〇銭、炭一貫目三錢五厘（同右）

明治二二年（一八八八）○四月一七日、市町村制公布、本県は二二二年に施行

明治二三年（一八八九）○四月一日、中央線中野、立川間開通
○四月一六日、東海道線、静岡・浜松間開通

○八月一日、切石村誕生（寺沢・切石・夜子沢・手打沢合併）
○西島消防組設立、笠井惟造、佐野判逸、望月彦太郎、望月万造
野中貞作、笠井繁兵衛、笠井半平ら幹部として活躍

明治三四年（一八九一）○三月、一市九郡に警察署設置、鯉沢警察
署は南巨摩郡警察署となる（県史）

○四月一六日、木内信春（南部）ら中心となり旧河内領村民有志
切石に集合、南巨摩・西八代両郡分合を協議県庁に陳情（県史）

○一〇月新制度下第一回県会選挙、本町関係議員、笠井惟造（西
島・二宮貫平（共和）当選（六十年誌）

○一〇月一七日、鯉沢区裁判所開所式挙行

明治三五年（一八九二）○九月二〇日、切石村を静川村と村名改称

明治三六年（一八九三）○六月、切石・天野義守五〇人程度の座繰
製糸工場開業

○このころ西島岡町佐野伊作女工十数名で横糸取工場開業

○一〇月県会半数改選、本町関係、留任笠井惟造、若林謙三
明治三七年（一八九四）○八月二日、日清戦争勃発

明治三八年（一八九五）○曙村・佐野幸作、大須成村・秋山助蔵両
名、富士見山官有地三七万坪の金鉱試掘願を南巨摩郡庁に提出

○県会半数改選、本町関係、天野延太郎（切石）当選（六十年誌）
明治三九年（一八九六）○一月、早川運輸会社、硯島村に設立

○身延線の前身駿甲鉄道、岩間・大河内・丸滝間の勝坂線、屏風
岩線の二線計画案に対し、本町および早川沿岸一〇か村は屏風岩
線、宮木停車場の設置請願（飯富・古屋保文書）

○飯富、八日市場の両校を合併伊沼村（いぬま）字原に原尋常小学校開設

明治三〇年（一八九七）○九月、西島改良製紙業組合設立

○一〇月、県会半数改選、本町天野延太郎（切石）留任
明治三一年（一八九八）○三月二五日、大須成村の一部、日向南沢
が静川村に編入（静川村勢要覧）

○五月、甲府・勝沼間馬車鉄道開通

○八月、切石避病舎建築、この費用百円（切石文書）

明治三三年（一九〇〇）○この年、鯉沢馬車鉄道会社開始

○八月、切石駐在所開設

○一月、西島尋常高等小学校と改称し、現在地に校舎新築

明治三四年（一九〇一）○飯富に部長派出所を置く（県誌）

○六月、切石に望月製糸工場（望月棟太郎）創立、工員二〇人

明治三五年（一九〇二）○七月六日、中央線笹子ずい道竣工

○この年、佐野節朗、西島に山梨産紙同業組合設立（県誌）

明治三六年（一九〇三）○中央線甲府・八王子間開通

○切石郵便局、電報取扱開始（甲府局誌）

○一二月一〇日、西島郵便取扱所開設、明治三八年四月一日郵便
局に昇格（甲府局誌）

明治三七年（一九〇四）○三月五日、飯富郵便取扱所開始、明治四
二年三月六日郵便局に昇格（甲府局誌）

○切石銀行創立、資本金五万円、初代取締役天野延太郎

明治三八年（一九〇五）○三月、甲府・東京間電話開通

明治三九年（一九〇六）○この年山梨鉄道馬車会社、名称を山梨軽
便鉄道会社と改め、甲府太田町間、甲府石和間、甲府鯉沢間の旅
客貨物を運輸（大正山梨県誌）

○この年秋、愛馬思想啓発のため、予備役陸軍砲兵少佐男爵富岡復起を会長として善光寺裏に競馬開催せるを本県競馬会の始めとす（大正山梨県誌）

○この年切石にて競馬もっとも流行する（県史）

○驛村駐在所を江尻窪に設置

明治四〇年（一九〇七）○大水害により西島村四〇町歩の水田と四〇戸の家屋流失、つづく明治四三年の大水害で村から一二戸が明治四四年北海道に移住

○一月、県会改選、本町関係議員、星野勝陳（曙）当選

明治四三年（一九一〇）○この年、切石に工員百人程度の機械製糸工場開業、取締役社長・天野桃太郎

○一月、原駐在所開設

○二月一日、切石尋常高等小学校新築校舎落成式

○五月、西島尋常高等小学校増築工事竣工（現在校舎の前身）

明治四四年（一九一一）○五月一日、中央線全通、これより富士川舟運衰退す

○飯富村に電灯がつく

○一月、県会改選本町関係、星野勝陳（古長谷）依田常吉（手打沢）若林弘毅（共和）当選

大正時代

大正元年（一九一二）○大正初年、甲州名物の「うまい物だよ南瓜のほうとう」という言を聞けり、如何なる食糧にや篤と調査研究し

たし、故に代金引替小包郵便にて至急送付されたし」との依頼状が富山県農会より本県農会へ送達され、当時好個の笑話となる（大正山梨県誌）

○大正初期、西島笠井重吉、思潮堂と称する印刷業開業

大正二年（一九一三）○七月二日、飯富村耕地整理組合により五町九反の耕地整理実施、工事費二千元（県統計書）

○八月起工、西島村耕地整理四〇町歩、工事費一、一二八円、大正一年八月工事完了

○西島・岩崎ずい道貫通

○西島・切石に身延電灯株式会社供給の電灯がつく

大正三年（一九一四）○西島の場製紙業笠井伝造、率先して鉄板の蒸気三角回転乾燥機を使用

大正四年（一九一五）○田原に電灯がつく

大正六年（一九一七）○この年三月より大正九年八月まで、手打沢耕地整理九町四反、工費一、六六九円

○八月二九日より三日間、切石、手打沢で家畜市場開催、牛馬入場頭数五〇頭（村政取調書）

○一月、郡産牛馬組合主催、第一回共進会を静川村に開催、出場頭数二五頭

○一月二七日、駿甲鉄道富士・内船間開通

○小笠原・鵜沢間乗合自動車営業開始（綜合郷土）

大正七年（一九一八）○八月、米価昂騰、各地に米騒動起こる。甲府山田町若尾邸焼打ち

○菅沼城跡供養塔の傍に社殿を建立し、史跡の保存をはかる（静

川村勢要覽)

大正八年(一九一九)○一〇月県会改選、本町切石望月黎一郎当選

○甲駿往還、県道となる

大正九年(一九二〇)○四月一〇日、切石教員養成所開設

○五月一八日、駿甲鉄道大島・身延間開通

○切石に富士製糸株式会社設立、資本金三〇万円、取締役天野桃三郎

○この年、曙に電灯がつく

○この年より二〇か年を要し富士川改修着工、昭和一五年竣工、総工費一、〇五〇万円(治水)

○この年、早川木製つり橋完成

大正一〇年(一九二一)○発電所工事のため早川橋・新倉間トロッコ軌道開設、発電関係の人荷輸送

○この年、鰍沢・甲府間に乗合自動車開通

○この年、寺沢に電灯がつく

大正一一年(一九二二)○一〇月、手打沢一二町歩耕地整理、工事費二四、七七四円(県統計書)

○平須・大塩に電灯がつく

○大須成小学校、久成・中田に校舎新築、平須、久成分教場廃止

大正一二年(一九二三)○身延つり橋完成、工費四五万円、渡橋料五銭

○鰍沢・身延間に富士川飛行艇(和船に飛行機のエンジンとプロペラ取付け)を通じ旅客輸送開始

○九月一日正午、関東大震災、三日間にわたり震動一〇五回、南

巨摩郡死者三、負傷者一三、全壊八〇、半壊三四六(鰍沢町もつとも激甚)、西八代郡死者二、負傷二、全壊七、半壊四八(大正

山梨県誌)

○一〇月、県会改選、本町切石天野桃三郎当選(六十年誌)

大正一三年(一九二四)○石畑に電灯がつく

○八月、山梨輕便鉄道は甲府電車軌道会社に移譲解散、昭和四年山梨電気鉄道会社と改称(峽西電鉄の前身)(県誌)

○一〇月、西島村耕地整理一二町五反、工費七二、二二〇円

○富士電気軌道会社(富士急)輸送開始(県誌)

○一月、飯富村耕地整理一九町歩、工費六四、六四一円

大正一四年(一九二五)○この年から二か年、久成区で久成川の水を引き自家発電し三二戸に送電、工費二、四〇〇円、明るさ一〇

ワット、昭和元年電灯入村により廃止

○三月、夜子沢耕地整理二七町八反、工費二二、九三六円

○三月、寺沢耕地整理二五町五反、工費二一、三五〇円(統計)

大正一五年(一九二六)○二月現在南巨摩畜産組合長依田常吉

○大正時代の競馬開催地、甲府、吉田、河口、猿橋、日野春、小笠原、久那土、市川、西島、南部、毎年春秋二回、入場券発売数

各所ごと三万円から一〇万円の盛況を呈す(県誌)

○この年二月、峽南電力会社が天神滝上から常葉川へ落水して一万九千馬力の発電計画、甲府電力会社および富士身延鉄道会社が西島より波木井に落水して三万馬力の発電計画を申請(県誌)

○このころ飯富・小林武男、小林銀行飯富支店を経営(県誌)

○当時の農村の楽しみは、夕顔棚の下涼み、鎮守の祭りの宮ずも

う、素人芝居、あるいはこたつの中の発句作り、また夏の夜の盆踊り（大正山梨県誌）

昭和時代

昭和二年（一九二七）○二月七日、切石に峡南実科高等女学校開校

○このころ飯富早川雄一郎旅館（扇屋）を経営の傍ら飯富製糸会社を創立して地方発展に努める（大正山梨県誌）

○このころ飯富士橋三四郎、飯富酒造会社（合資）創立（同右）

○同じく飯富士橋玉作醬油製造業開始、甲駿両国に供給（同右）

○この年、鰍沢・身延間を乗合自動車一六人乗り七台が営業開始

○二月、身延線、身延・市川大門間開通

昭和三年（一九二八）○身延線、市川大門・甲府間開通（全通）

昭和四年（一九二九）○八月、月見橋開通、全長一四八呎、工費九

万余円、半額国庫補助、従事労務者一万有余名

昭和五年（一九三〇）○二月二八日、増穂小林銀行取付け倒産

○切石局に電話架設

昭和六年（一九三一）○切石・富士製糸工場、飯富製糸工場閉鎖

○三月二六日、市川銀行倒産

昭和七年（一九三二）○八月二四日、切石銀行を廃止し、切石興産

株式会社と商号変更、取締役佐野嘉盛

○曙村、経済更生計画指定村を申請し認可、百円の補助金を受く

昭和八年（一九三三）○現在の一級国道五二号線が県道に昇格

○七月一日、原村誕生（伊沼・八日市場・飯富組合村合併）

○二月二〇日、救農事業の曙・宮窪すい道竣工

○飯富橋（木橋）架橋

昭和九年（一九三四）○早川橋・新倉間を軌道組合による九台のト

ロッコ、一般旅客の輸送を開始

○五月三〇日、救農事業の曙地区、間遠すい道竣工

○八月、吊り橋を廃して現在の早川橋竣工

○八月、西島村、経済更生計画指定村認可、補助金百円

昭和一〇年（一九三五）○九月、大水害による手打沢部落流失

○一〇月、県会改選、飯富平林太一、西島笠井嘉一（補欠）当選

○大須成村経済更生村指定、助成金百円

昭和十二年（一九三七）○四月、第二〇回衆議院総選挙、笠井重治

再選

○この年、西島村優良経済更生村として特別助成事業費補助金五

七五〇円を受く

昭和十三年（一九三八）○一〇月、身延線の国鉄借上げ、借上料年

間九三万六千円

昭和十四年（一九三九）○県会改選、飯富平林太一当選

昭和十五年（一九四〇）○二月、甲州西島手すぎ和紙工業組合設立

○早川橋・新倉間に一六人乗りバス営業開始

昭和十六年（一九四一）○国民学校令施行され、国民学校と改称

○五月、身延線を国鉄買取

昭和十七年（一九四二）○六月、地方事務所設置

○衣料切符制実施

昭和十八年（一九四三）○二月二七日、切石興産株式会社解散

昭和二〇年（一九四五）○七月六日、午後二時四〇分より約二時間甲府市大空襲

昭和二十一年（一九四六）○四月、第三回衆議院総選挙、笠井重治（無所属）当選

昭和二十二年（一九四七）○四月一日、学制改革、新制中学校誕生

○八月一日、田原郵便局開設

○九月、農林省山梨食糧事務所南巨摩支所静川出張所設置

昭和二十三年（一九四八）○三月、原地区に農業改良普及所設置

○八日市場地区にブドウ栽培導入

昭和二十四年（一九四九）○一月、西島工管区設置

○四月、平林太一県議会議長に当選

○五月一七日、曙中学校新校舎落成式挙行

○一〇月、三か村組合立甲南中学校新校舎落成

昭和二十五年（一九五〇）○二月、西島手すき和紙工業協同組合結成

○六月、第二回参議院選挙、平林太一（地方区）当選

○八月二五日、原中学校新校舎落成、少年消防隊結成

昭和二十七年（一九五二）○現在の飯富橋竣工

○飯富線（早川橋・下部間）バス乗り入れ

○西島小学校新校舎落成、建築費七百万円

昭和二十八年（一九五三）○五月一八日、現在の国道五二号線が県道

から国道二級に昇格（甲府・静岡線）

○九月一日、町村合併促進法施行

○一月、中富、早川両町国民健康保険病院として飯富病院設立
昭和二十九年（一九五四）○八月一七日、中富町発足（西島・大須成

・静川・曙四か村合併）初代町長に依田行雄当選

昭和三十〇年（一九五五）○三月、切石・下田原間の富士川橋竣工

○共和保育所設置認可

○六月一日、原保育所設立認可

○八月一日、原村、中富町に編入

○曙小学校新校舎落成 ○原小学校新校舎落成

昭和三十一年（一九五七）○西島に機械製紙工場二か所誕生

昭和三十三年（一九五八）○三月、西島保育所落成

○四月一日、宮木、下田原、下部町より分町、中富町へ編入

○七月二五日、原小学校新校舎落成

○大須成小学校新校舎落成、大塩分校廃止

○富士川、国の直轄河川工事区域に編入

○九月、町長選挙、笠井忠治当選

昭和三十四年（一九五九）○四月、第四期県議選、望月獅馬夫当選

○四月一〇日、田原線（鰍沢―田原、古関―田原）のバス乗入れ

○原果樹研究会を中心に峡南缶桃組合結成、桃栽培導入

○八月、台風七号、九月、一四号本県通過、本町も未曾有の惨害

昭和三十五年（一九六〇）○災害住宅一三戸完成

昭和三十六年（一九六一）○甲南中学校生徒急増に伴う校舎増築

○原中学校生徒急増に伴う校舎増築

○四月一日、大塩線（大塩―鰍沢）バス乗入れ、一日五往復

昭和三十七年（一九六二）○静岡保育所設立認可

○原小・中学校給食施設竣工

○曙保育所開設

○七月、西島プール完成

○九月、町長選挙、川口孝喜当选

昭和三八年（一九六三）○四月一日、石畑大火、一八戸全焼、二戸半焼、被災者一七人

○四月、第五期県議会選挙、望月獅馬夫再選

○五月一日、一級国道五二号線に昇格、拡幅（七・五㍎）舗装工事開始

○九月、曙小学校給食室竣工、一二月給食開始

昭和三九年（一九六四）○六月六日、早川・矢細工線延長一、三八㍎を自衛隊により竣工、工費四七〇万

○三十七年起工の伊沼線失対事業完成、一、一七〇㍎、九、二〇八名就労、工費七二万四千円

○二月一日、甲南学区給食センター竣工式、二三日給食開始

○大須成地区、吉屋部落に電灯つく

昭和四〇年（一九六五）○国保全世帯七割給付実施

○九月一日、切石プール完成

○中富・六郷・下部三町組合立し尿処理場完成

昭和四一年（一九六六）○四月一日、共和保育所休園

○町道大塩―久成線、トンネル工事二か所、工費四百万円で着工

○切石―中山線一、一五〇㍎改修、工費六百万円

○富士見山、県立自然公園に指定さる

○六月一日、原中学校体育館落成

○組合立火葬場建設、工費四百万円

○八日市場地区、国道バイパス着工

○九月、町長選挙、笠井清巳当選

○台風二六号来襲、被害総額約八億

昭和四二年（一九六七）○間遠道路二、八七九㍎自衛隊にて竣工

○町民歌制定 ○町勢振興審議会誕生

○一月、中富町文化協会誕生

昭和四三年（一九六八）○新早川大橋完成、全長五五七㍎、工費二億三千五百万円、県下最長の大橋

○一月一日、町民歌発表会

○中富町青果物出荷組合、花き出荷組合設立

○妊婦用ミルク無償支給

○曙プール竣工 ○青少年のための町民会議発足

○七月三十一日、切石農集電話開通、四一五戸加入

○中学校統合促進委員会発足

昭和四四年（一九六九）○「町の木」にナンテンを指定

○七月、中富町誌編さん委員会発足

○七月二五日、飯富病院改築完成、事業費六千八百六二万五千円

○八月一六日、町制一五周年記念式典挙行

○原プール完成、工費五五一万円

○大須成プール完成、工費三四〇万円

昭和四五年（一九七〇）○一月、中富町長期総合計画完成

○二月、第一回青年議会開催

○四月、中富町森林組合発足（大須成・静川・曙・共和の単位組合合併）

○五月、過疎地域対策緊急措置法施行され、本町も指定さる

○中富町過疎対策振興計画策定、五か年の事業量約九億円

○九月、町長選挙、笠井清巳再選

○繁栄条例該当の本町に就職する若者一名に初の奨励金交付

昭和四十六年（一九七二）○四月、老人医療公費負担決定（七五歳以上）

○農集電話追加工事完成（本町電話加入率九七％となる）

○西島公民館完成

○平須公民館完成

○峡南衛生組合立ゴミ処理場完成、処理能力一日約二〇ト

○山村振興、生活改善センター中山部落に完成、工費六三〇万

○県政功績団体として県下で一町表彰される。（二〇月）

○町誌発刊一、五〇〇部（二二月）

笥	笥	笥	佐	笥	笥	長	長	笥	佐	笥	坂	斎	笥	遲	笥	笥	笥	野	野	笥	望	塙
井	井	井	野	井	井	田	田	井	野	井	本	藤	井	沢	井	井	井	中	中	井	月	
伸	良		良	忠	猪	伴		安	昭	高	愛	幹	齊	一	ス	太	公	正		秀	忠	榮
一	長	武	夫	重	作	作	林	宜	三	治	造	三	七	三	ミ	郎	久	平	至	輝	良	治
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

六〇八	五七二一	五七三一	五七五一	五五五	五七〇一	五六九	六四九	五六二	五五八	一二五	四七九	四八八	四七九	五六一	五四八	五四七	五〇三	四九六	四九五	五一五	五一七	四五八
-----	------	------	------	-----	------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

望	笥	笥	笥	笥	笥	笥	依	笥	笥	笥	笥	笥	伊	伊	笥	望	笥	笥	金	笥	笥	笥
月	井	井	井	井	井	井	田	井	井	井	井	井	藤	藤	井	月	井	井	輪	井	井	井
浜	一	正	元	平		好	長	幸	通	道	利	義	德	隆	二	輝	紀	治	治	一	修	芳
吉	寿	則	次	正	平	茂	久	榮	典	子	政	範	隆	三	男	元	彦	男	男	男	一	郎
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

六一四	二八一二	二八一〇	五九〇	五八九	五九三	五九四	五九七	六〇五	五八一	五九八	五九七	五八二	五四四	五七一	五七六	五八四	五八六	五八六	六〇四	五七二	六一〇	六〇九	五六七
-----	------	------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

笥	笥	笥	笥	笥	笥	笥	笥	笥	佐	山	依	佐	佐	笥	望	笥	斎	笥	笥	笥	笥	望
井	井	井	井	井	井	井	井	井	野	本	田	野	野	井	月	井	木	井	井	井	井	月
隼	敏	勝	左	俊	章	武	恭	俊	嘉	米	三	仁	賀	忠	友	次	一	完	二	恒	竹	健
人	秀	德	内	一	秀	男	一	次	盛	吉	郎	市	男	興	一	郎	男	作	郎	夫	十	一
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

六三三	六三五一	六三六一	六二一二	六一五	六二〇	六二一	六三七	六三八	六四一	一一一	五八八	六〇五	六〇五	五〇五	六五三	五六三	五七六	六二二	四一九	四二二	六一一	六一四
-----	------	------	------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

世帯主名簿

笠井	佐野	井上	笠井	笠井	笠井	笠井	望月	笠井	一瀬	笠井	望月	長田	望月	佐野	上野	笠井	笠井	松土	望月	望月	笠井	林
弘男	福貞	作	きよじ	秀輝	かち江	太郎	親	章	憲	善晴	つね	唯一	省吾	一次	宣久	昭次	生一	角平	さじ	虎一	豊作	五月

〃 〃

一、一六二	一、一三一	一、一四三	一、一六一	六三三	一、一四一	一、一四三	一、一四四	一、一五二	一、一九七	一、一九六	一、一四八	一、一四五	一、一四五	七三〇	一、一五一	四四三	一、一四七	七三〇	六三一	六三一	七二七	七二七
-------	-------	-------	-------	-----	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-----	-----	-----	-----

笠井	笠井	望月	上杉	笠井	笠井	笠井	望月	笠井	笠井	望月	望月	笠井	笠井	大倉	深沢	佐野	赤池	赤池	望月	笠井	佐野	笠井	井上
松太郎	成高	その	良平	清寿	治吉	波江	恒造	武司	伝一	弥太郎	たみ子	弘東	貢	憲紀	雄輝	源高	賢三	恒造	久幸	章吉	富夫		

〃 〃

一、二二三	一、二二二	一、二二一	六二〇	一、二〇六	一、一四七	一、一四八	一、一九九	一、一九九	一、二〇九	一、二二五	一、二二三	一、二二七	一、二四一	一、二四〇	一、一九五	一、一九三	一、一九三	一、一九三	一、一九二	一、一九二	一、一九〇	一、一九〇
-------	-------	-------	-----	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

笠井	上田	深沢	笠井	笠井	佐野	笠井	笠井	笠井	望月	笠井	笠井	笠井	笠井	笠井	笠井	笠井	笠井	笠井	佐野	笠井	笠井	笠井	笠井
貴夫	二夫	まつよ	欣二	亀藏	きよじ	与一	俊一	輝男	満仲	忠信	孝治	貞治	啓久	政男	よし子	信治	あきの	勝正	憲三	房美	康伯	一彦	益夫

〃 〃

一、二五八	一、二六〇	一、二九六	一、二六二	一、二六二	一、二六四	一、二六六	一、二九六	一、二六七	一、二六九	一、二七七	一、二七八	一、二七六	一、二四六	一、二七三	一、二七五	一、二四七	一、二四七	一、二四〇	一、二四五	一、二四二	一、二四三	一、三三〇	一、二二四
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

望月正光	望月勝男	望月房太郎	笠井恒	長田八郎	長田真一	望月将司	望月信雄	笠井甲生	武田覚義	笠井ひさ子	依田実	笠井こま	笠井久男	笠井武政	佐野盛	望月朝男	笠井雅太郎	大島みや	笠井直道	望月又市	望月新	佐野一友
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
一、三九八	一、三九九	一、四四二	一、四〇一	一、四二四	一、三〇九	一、三一二	一、三八一	一、三二三	一、三一四	一、三〇六	一、二七〇	一、三四二	一、一三三	一、一三三	一、一三二	一、二九六	一、一三七	一、二五一	一、二五三	一、二五四	一、二五五	一、二六五

望月祐市	望月実造	望月もりよ	望月善三	笠井利長	望月忠勝	深沢徳夫	望月隆一	望月まき子	荒川四五郎	依田あい子	望月徳一	望月二三男	望月石蔵	望月豊一	望月秀彦	笠井美翰	望月喜男	望月清純	望月弘喜	依田英雄	笠井徳長	佐野喜内	望月悦三
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
一、三九〇	一、四五三	一、三三八	一、三三七	一、三三七	一、三三七	一、三七四	一、三七六	一、三五九	一、三二八	一、三九一	一、三三一	一、三七四	一、三七二	一、三八四	一、三八三	一、三七七	一、三八四	一、三九六	一、三九七	一、三三二	一、三七七	一、三三三	一、四四七

佐野幸男	伊藤美彦	笠井経造	笠井次平	笠井慶太郎	依田政雄	笠井方夫	長田友平	石川美登利	中村隆信	笠井利政	笠井惟彦	笠井志づ	望月捷紀	佐野敬治	佐野丈喜	望月長太郎	大森大作	望月明敏	望月もり子	望月丑男	佐野篤彦	佐野忠雄	小林義雄
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
一、一三二	一、二二一	一、一六八	一、一二一	一、一七一	一、一二〇	一、二七一	一、一二〇	一、一一九	一、一七六	一、一七九	一、一八〇	一、三四八	一、三五〇	一、三五二	一、三六六	一、三七〇	一、三二〇	一、三七三	一、三六八	一、三六一	一、三九四	一、三九二	一、四五二

世 帶 主 名 簿

長谷川 とよ子	望月 よし江	望月 武男	長田 清寿	佐野 安正	望月 茂歳	井上 宜安	野田 久治	笠井 美根男	望月 光儀	長田 文雄	佐野 延太郎	長田 央	佐野 広文	笠井 勘三	長田 桃代	大森 武	深沢 すゞ子	望月 祐太郎	長田 一平	長田 幸蔵	一瀬 馨	有泉 上	荒川 上
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
一、四八六	一、四八六	一、四九〇	一、四九五	一、四四九	一、四七四	一、五五八	一、四七四	一、四七二	一、四七〇	一、四六〇	一、四六九	一、四六八	一、四六二	一、四五九	一、四六九	一、四五六	一、四五五	一、四三三	一、一六八	一、一六三	一、一六六	一、一六六	一、一六三
長谷川 溢太郎	望月 とめの	望月 純夫	大森 安子	大森 重次	望月 正巳	望月 教三	望月 幸繁	依田 俊雄	望月 至	望月 卯作	佐野 三郎	長田 堅三	望月 あやめ	佐野 博	佐野 松五郎	長田 和正	長田 双二	長田 尊国	佐野 源	佐野 きくよ	佐野 三男	佐野 三男	佐野 三男
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
一、五三〇	一、八八三	一、八七六	一、八七五	一、八七五	一、八七〇	一、八六九	一、八七〇	一、九〇二	一、八九四	一、八八四	一、五五〇	一、八八七	一、八八九	一、四八三	一、四八〇	一、四八七	一、四八七	一、四七六	一、四八七	一、四八七	一、四八七	一、四八七	一、四八七
佐野 誠一	深沢 喜一	堀口 忠治	佐野 栄治郎	望月 昭	笠井 友三郎	望月 卓	望月 四郎	村松 豊	佐野 訓久	佐野 若男	佐野 万作	佐野 一治	佐野 吉正	笠井 義彦	笠井 文子	望月 幸雄	長谷川 幸雄	佐野 あき	佐野 正晴	望月 信明	望月 福造	望月 ももよ	望月 房吉
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
一、五三六	一、五四二	一、五六二	一、五六四	一、五三五	一、五六七	一、五六五	一、五二九	一、五三〇	一、五三〇	一、五二二	一、五二二	一、五一八	一、五一六	一、五一五	一、五二四	一、五二五	一、五二四	一、五二二	一、五二二	一、五一二	一、五一〇	一、五〇〇	一、四九六

世帯主名簿

若林 理三郎	一、九二八	笠井 芳彦	一、八四六	笠井 員満	一、六五五
佐野 寛	一、九五五	佐野 嘉一郎	一、九七一	神宮司 茂	一、六七七
依田 晴一	一、九二六	長谷川 虎雄	一、九五七	笠井 直	一、五八〇
長谷川 政雄	一、九二八	長谷川 一昭	二、〇三〇	地場 和	一、五九一
望月 信量	一、九三〇	依田 春吉	三、五七七	深沢 功	一、五九二
長谷川 磯二	一、八二三	深沢 半治	三、四五二	佐藤 忠君	一、五九〇
長谷川 武平	一、八二二	深沢 清徳	三、五三二	小松 洋	一、五八四
望月 欣一	一、九三六	大須成地区			一、五八一
笠井 みつ江	一、九三五				神宮司 とも子
望月 久一	一、八三九	神宮司 この	一、五七六	佐藤 治雄	一、五八二
望月 武吏	一、八三六	佐藤 秀三	大塩 住 所 一	佐藤 鶴五郎	一、五七三
望月 生造	一、八二八	佐藤 盛雄	一、六一六	地場 輝雄	一、五七〇
望月 徳市	一、八三三	河崎 末武	一、六一二	深沢 ちやう	四、二四三
望月 一	一、八三四	佐藤 近幸	一、五九六	笠井 忠治	一、五六一
佐野 常治	一、八三一	佐藤 はつえ	一、六二四	笠井 常雄	一、五八四
笠井 弘貴	一、八一四	佐藤 信明	一、六二三	三沢 みよの	一、五六六
長谷川 清治	一、八〇七	河崎 秀秋	一、六二五	地場 富太郎	一、五六五
長谷川 昭彦	一、八〇七	佐藤 千明	一、五九三	佐藤 久	一、五六六
笠井 志郎	一、八〇四	佐藤 静馬	一、六三四	樋川 美訓	一、五六六
深沢 勝次	一、七六〇	笠井 大栄	一、六五〇	樋川 竹重	一、五五二
望月 とみゑ	一、九三八	佐藤 学	一、六五三	草塩 きぬよ	一、五四七
藤沢 とみ子	一、七八五	佐藤 一政	一、六三二	佐藤 明夫	一、五五三
佐野 義雄	一、七九五	小松 二男	一、六二九	佐藤 藤太郎	一、五五二

堀井義雄 堀井やあの 堀井郷吉 堀井光男 地場松三 望月伊勢男 望月正一 深沢さかえ 神宮昭三 望月昭三等 地場宗春 地場敏子 地場寅正 神宮字利定 地場健造 佐野悦司 小松進 佐藤登 神宮司東 神宮字恒男 深沢一郎 深沢良太郎 地場峯雄 佐藤豊

〃 〃

一、四〇一 一、四〇四 一、四一九 一、四一六 一、四二二 一、四五一 一、四五六 一、四六二 一、四八三 一、四八四 一、五一四 一、五〇三 一、五〇五 一、五〇六 一、四九九 一、九九八 一、四九四 一、四九七 一、五二七 一、五二八 一、五三三 一、五三四 一、五三五 一、五三六

依田とらよ 渡辺高明 渡辺好栄 渡辺好一 渡辺長治 渡辺明重 佐野明伯 依田左門 依田みどり 依田金長 依田正行 依田恵重 依田英造 依田義晴 依田清子 佐藤一夫 佐藤はつ子 津島辰尾 神宮司文雄 望月清重 堀井はまの 神宮司守一 小松元女

〃 〃

一、九七一 一、九八二 一、九八一 一、九八〇 一、九四七 一、九七三 一、九六三 一、九五九 一、九一〇 一、九四八 一、九四九 一、九五五 一、九五〇 一、九四四 一、九四〇 一、五九三 一、五〇五 一、七二〇 一、三四二 一、三四一 一、三六一 一、三八五 一、三八七

佐野操子 佐野輝吉 佐野安信 佐野稔 渡辺ヲタダ 望月忠教 望月正次 望月満治 望月常範 佐野泉 佐野二三 佐野磯次郎 依田常久 佐野富昭 佐野泰三 佐野公臣 佐野武雄 大根玄妙 渡辺英夫 笠井千織 依田芳則 佐野はま子 依田はま子

〃 〃

一、三〇一 一、二七四 一、三〇四 一、二三四 一、二五九 一、二五七 一、二五六 一、二五三 一、三〇一 一、二九二 一、〇五〇 一、〇三五 一、〇二〇 一、〇三〇 一、〇一二 一、九九七 一、〇一一 一、九九八 一、九九〇 一、〇〇七 一、〇五〇 一、〇〇四 一、〇〇三 一、九八七

世帯主名簿

幡野嘉光	幡野忠男	深沢寛	深沢倉一	神宮寺正	深沢一昭	深沢求	深沢和一	深沢晴雄	佐野あさ子	佐野烈子	増田あさよ	穂山直道	穂山道男	仲沢ゑい	川口宗明	松島くら	松島とくよ	千葉一男	川口武士	千葉久雄	松島いその	川口てるゑ	佐野正義
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平須	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
五四	五二五	五二六	五三四	五三六	五四五	五五三	五五二	五五九	五五八	五六五	五七一	五七八	五八二	五九五	八二八	八一八	八一五	八〇七	八〇六	八一七	九七一	九六七	
秋山由一	神宮寺虎雄	神宮寺徳恵	神宮寺うめ	神宮寺のぶ	神宮寺もとよ	神宮寺清次	神宮寺昇	佐藤澄子	神宮寺はるじ	望月まさ	仲沢カノエ	増田定雄	神宮寺とも	幡野義信	望月英雄	望月千秋	深沢嘉幸	仲沢昇	斎藤志まゑ	望月宗誉	深沢忠良	深沢とみ	深沢武文
久成	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
五、〇六五	二、一八四	二、一六九	二、一六二	二、一六四	二、一八九	二、一四五	一、九八五	一、九八七	二、一三四	二、〇七三	二、一二六	一、九八九	二、一一六	四、一二二	四、五二	四、五四	四、〇二	四、一八	四、五五	四、五八	四、九一	四、九九	四、八九
松七五三熊雄	秋山繁治	秋山四郎	秋山久米子	秋山正典	斎藤武夫	斎藤亀治	山本修一	斎藤米雄	松七五三ひさよ	斎藤仁	秋山うめ	大森茂樹	大森喜美恵	大森みよ子	大森泰	大森直之	佐野たつ	神宮寺小仙	大森惟志	大森武代	大森千治	大森千秋	安立鈴子
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
一、五一四	一、五四八	一、五四五	一、五四四	一、五四三	一、五〇八	一、五二六	一、五一六	一、四五四	一、四四五	四、八七六	四、八六八	四、八六〇	四、八五九	四、八五八	四、八六六	四、八九九	四、八九九	四、九一〇	四、九四四	四、九四七	五、〇〇〇	五、〇〇五	

世帯主名簿

深沢利保 深沢宮子 深沢秀樹 深沢宇一 深沢やすよ 深沢海蔵 深沢達恵 深沢巖 笠井金人 幡野ゆき江 深沢正三 深沢惣八 山下恭三 深沢基治 深沢正之助 深沢美雄 深沢義之 深沢和一 深沢ふみの 深沢はなよ 深沢一郎 深沢寛一 深沢なか

〃 〃

一、二七二 一、二五〇 一、二五〇 一、二九四 一、二八六 一、二四一 九三九 九三四 八九一 一、二七二 九二一 一、二七二 九一五 八二一 八二一 九〇九 九〇一 八九七 一、〇〇三 一、〇〇七 九二一 一、〇〇五 八二一 一、〇五八

深沢政春 津嶋正夫 津嶋ヲダイ 望月貞吉 小宅虎雄 若松与市 若松邦一郎 深沢長作 依田英志郎 依田忠治 依田博雄 依田一正 依田直 依田満津代 依田まさ子 木下性進 深沢盛雄 深沢勝徳 深沢広吉 深沢竹子 深沢敬喜 望月イヨ子

〃 〃

一、五九二 一、八二五 一、七六一 一、五八二 一、八九三 一、八九三 一、八九三 一、八七五 一、五七四 一、五七〇 一、五五三 一、五五四 一、五六六 一、五六四 一、四六六 一、四六六 一、四一九 一、四二五 一、四〇三 一、四〇四 一、二七七

幡野重鰐 幡野昌一 佐野しづゑ 望月かひの 望月とみ 望月文治 望月昌訓 松田きよ子 樋川すけの 笠井うめの 笠井茂明 笠井武雄 笠井チヨノ 樋川ナカ 樋川孝平 松田良行 松田隆三 松田繁範 松田知恵子 松田三男 松田清 松田具真 深沢政長

〃 日向南沢 〃

七二五 七二四 七二二 七三〇 八四八 八五三 二四一 五、七七八 五、六七五 五、六六六 五、六五五 五、七五六 五、七六〇 五、七六七 五、八一七 五、八二三 五、八二二 五、八九三 五、八九六 五、八九五 五、八二三 一、五九九

深	奥	佐	樋	土	佐	望	埜	望	遠	遠	尾	松	川	川	望	望	望	望	望	川	望	望	幡
沢	山	野	川	橋	野	月	村	月	藤	藤	形	田	久	久	月	月	月	月	月	久	月	月	野
	藤	知	亀	寿	六	一	喜	秀	隆	正	大	俣	玉	忠		文	芳	一	保	富	正	高	
栄	丸	治	美	雄	朗	郎	友	雄	夫	光	作	夫	一	友	保	広	一	江	房	士	治	利	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	寺	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
												沢											

三													五										
六													六										
一	八	四	三	三	二	三	三	三	三	三	三	六	三	三	六	一	八	六	三	六	六	六	六
二	二	九	九	七	七	七	一	一	一	一	一	九	三	四	六	九	三	四	六	三	五	四	四

幡	河	河	河	河	河	神	依	望	渡	望	望	望	遠	笠	幡	佐	佐	佐	佐	笠	川	河	渡
野	西	西	西	西	西	宮	田	月	辺	月	月	月	藤	井	野	野	野	野	井	口	窪	辺	
良	義	源	義	ト	米	寺	行	梅	貞	忠	千	金	勝	棹	嘉	一	つ	一	金	正	真		
元	雄	徳	一	ク	子	茂	雄	子	夫	治	森	一	代	男	譲	親	ね	郎	次	作	雄		
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	

一																							
〇																							
六	六	六	六	六	七	七	五	五	四	四	四	四	三	二	二	二	二	二	二	一	三	一	
七	四	三	〇	七	一	八	〇	一	六	三	六	七	一	七	〇	八	〇	三	一	三	九	一	

熊	依	渡	熊	熊	佐	望	内	望	依	大	川	内	深	望	幡	幡	深	渡	渡	望	深	幡	幡
谷	田	辺	谷	谷	野	月	藤	月	田	原	口	藤	沢	月	野	野	沢	辺	辺	月	沢	野	野
		正	弘	ぜ	哲	喜	英	泰	正	昭	啓	丑	加	光	茂	暉	利	武	金	義	行	熊	
祥	明	作	毅	う	郎	啓	雄	作	作	雄	一	重	与	春	子	朝	雄	彦	興	昌	保	雄	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	切	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
													石										

一																							
九																							
四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
	九	七	五	〇	二	五	八	〇	二	四	五	六	八	三	五	八	七	五	四	三	七	五	一

若林千玄	若林敬三	若林貞策	杉山登志患	笠井良徳	渡辺善智	出羽達行	佐藤二男	星野忠治	渡辺貞子	望月雄三	深沢金蔵	仙洞田英明	深沢勝国	三幡海英	近藤一由	望月貞治	墨田敏雄	赤池勝信	熊谷広一	依田嘉一郎	赤池治郎	松田一夫
------	------	------	-------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------	------	------	------	------	------	------	------	-------	------	------

一五四
一五五
一五六
一九八——
一九一
一九二——
一五七
一九〇——
一二六
一六七
一六九——
一八六
一六九——
一六九——
一四九——
二四六
一八五——
二五六
二六二
一八四
一六八
一七八
一八三
一八二
一八一

天高望保依樋深古星遠深天川樋保深笠内望深小森川天
野橋月坂田川沢屋野藤沢野口川坂沢井藤月沢林田下野
一由佳市愛清啓一義幸啓安太郎昭太郎啓一正孝
夫雄一正造子一作馬男一造一一郎一正孝

一八一
一八一五
一八〇
一八〇
七三八
六九〇
四一九
六九三
六九四
六五一
六四五
四九六
六四三
七〇〇
七〇一
六三九
六三一
六一二
六三八
六三八
六三八一二
四三三
四三四
四三二一二

荒 若 深 天 天 桜 望 望 渡 大 中 渡 深 宮 望 幡 幡 依 幡 依 神 樋 幡 望 宮 深 渡 中 大 渡 望 望 桜 天 天 深 若 荒
え ない 啓 三 郎 長 一 昇 阿 や 金 夫 輝 雄 平 八 郎 晴 友 睦 利 治 郎 英 雄 夫 明 樹 茂 樹 ソ ノ 通 馬 馬 一 栄 子 叔 勝 彦 子 邊

四四九 四四八 四四三 四四六 四二二 四二三 四二四 四二五 二九八 四四四 四四五 四二八 六二七 四四二 四二三 四二九 四三〇 四四一 四四〇 四四八 四三六 四三一 四三五 四三一 四四一 四四五

// //

// // // // // // // // // // // // // // // // 夜 // // // //

// //

世帯主名簿

川口光男	川口昭三	川口政文	川口芳徳	樋口利兵衛	川口文蔵	川口隆栄	秋山善栄	川口善文	政門朗	渡辺常明	佐野誉一	渡辺時子	渡辺重利	渡辺武弘	渡辺辰宗	川口義国	望月登よこ	渡辺かよ	小林平一	川口正男	幡野一三	渡辺三千太	川口ゑい
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

一、七三七	一、七三六	一、七二八	一、七〇〇	一、七〇〇	一、六九九	一、六七五	三、四三八	三、九一四	三、九二五	三、九三二	三、九三二	三、九四二	三、九六〇	三、九六一	三、九六七	四、一三八	四、一二四	四、一二四	四、一二二	四、一〇四	四、一〇三	四、一三三
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

佐野優	佐野貢	氏名	曙地	川口茂富	遠藤つるよ	遠藤きみ子	遠藤てる子	遠藤義治	遠藤正二郎	遠藤貞六	川口良一	川口儀雄	遠藤利一	川口春利	川口宗常	川口金雄	川口正宗	川口丑蔵	川口源一	望月為義
〃	〃	矢細工	住区	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
七八	二八			一、八四七	一、八四二	一、八四四	一、八三七	一、八三三	一、八三〇	一、八二五	一、七八〇	一、八二二	一、七九八	一、九六四	一、七六七	一、七六六	一、七三八	一、七四一	一、七一八	一、七四五

佐野義本	望月政	佐野益雄	佐野清一	望月達行	佐野義郎	望月吉忠	佐野久夫	佐野徳郎	長田康子	佐野義正	佐野義雄	佐野ミサエ	佐野芳康	望月常一	佐野良一	佐野茂幸	佐野ヲチヨウ	佐野善作	野崎貞雄	佐野時晴	佐野三好	浅井清隆
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

七七七	一九一	一九三	二〇四	一八一	一八三	二三八	一三九	一二三	一〇六	九四	一四八	一二八	七二	七三	一〇八	八二	五八	五七	三八	四一	三九	三七	三二
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----

// //

星 星 星 星 星 星 樋 星 星 星 中 星 樋 樋 上 上 上 望 佐 佐 佐 上 上 佐
野 野 野 野 野 野 川 野 野 野 根 野 川 川 杉 杉 杉 月 野 野 野 杉 杉 野
幸 一 和 初 量 ク 千 正 ま さの 宗 常 英 盛 定 正 幸 光 文
太 英 之 雄 久 ノ 代 道 政 明 雄 雄 実 昌 博 藏 雄 忠
郎 一 静 強 之 之 久 ノ 丸 道 己 政 明 雄 雄 実 昌 博 藏 雄 忠

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 古長谷 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

[illegible]

// // // // 福愿 // // // // // // // // // // // // //

1670

世帶主名簿

[illegible]

一、
一二六
一二九
一七五
二一八
二四四
四七六
四六〇
二四六
二四八
三〇七
四三三
四七五
四七七
四八九
六二二
六一九
六一七
六一五
五八三
五八二
五六七
七九〇

一、
二一九
三〇八

[illegible]

一、 三九六
五一五
五〇四
五九八
五一九
五七七
二六七
五七四
五八一
五八三
六九二
七四七
七九五
七九二
八二三
五七七

二、 一〇一
六九二
〇九四

[illegible]

七九一
六二三
六二三
六〇二
五九九
六〇〇
六〇四
六〇六
二六三
二六七
二八三
二八六一
二八〇
三〇〇
三三三
三三四
三六二
三七五
一一三
二七九
三九〇
三九九
三九四

遠藤茂芳	小野松男	遠藤和夫	遠藤義光	松木守男	松崎政子	山中キサ子	遠藤五良	遠藤桂子	山中久代	小野高春	山中薫雄	山中竹雄	松野潔	黒田一郎	近藤豊	松野幸作	加賀美ウタ子	樋川宣近	樋川立身	樋川シン	樋川幸積
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	中山	〃	〃	〃	〃

一、八〇一	一、八六五	二、〇七二	一、七九八	一、七九七	一、八七〇	一、七九六	一、七九二	一、八七六	一、八七九	一、八八四	一、七八五	一、七八四	一、七八〇	一、七七〇	一、八一二	一、八九四	一、七五九	一、七五六	一、二二〇	四八四	四八〇	四八一	四六〇
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-----	-----	-----	-----

山中義	山中はつえ	遠藤今朝美	遠藤はつゑ	遠藤忠至	遠藤孝雄	山中猛	山中茂男	山中フクエ	遠藤照雄	後藤豊	遠藤きみ	遠藤甲雄	遠藤侃一	遠藤司郎	遠藤敏行	松木政喜	遠藤喜文	樋川徳男	松野喜男	遠藤広作	遠藤一輝	遠藤徳通
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

三四	五三	二八	三五	三八	二七	二四	二一	二三	一、八四八	一、八五七	九一二	一、八四九	一、八四一	一、八五二	一、八五七	一、八五七	一、八五八	一、八六一	一、八〇八	一、八一〇	一、八〇九	一、八〇七	一、八〇三
----	----	----	----	----	----	----	----	----	-------	-------	-----	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

川崎金生	川崎せき	川崎文恵	遠藤重勝	遠藤幸	遠藤きく	遠藤文甫	遠藤孝	加賀美清盛	加賀美光裕	加賀美吉政	加賀美和三郎	加賀美一政	加賀美協太郎	遠藤ヒサ	加賀美種	樋川たまゑ	佐野利男	浅野さちゑ	尾崎正之	尾崎威	山中彰	加賀美優
〃	〃	遅沢	〃	〃	〃	〃	八日市場	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

一、一八一	一、一七八	一、一七七	一、〇四九	三、〇五一	三、〇五四	三、〇五六	三、〇六〇	三、一二八	三、一二五	三、一〇五	三、一〇二	三、一〇一	三、〇八三	三、〇八一	三、一〇九	一、六〇一二	一、六三七	九一二	一、〇六	一、〇四	一、〇五	一、二七
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	-----	------	------	------	------

望秋渡望佐佐笠望川白小小川望望望樋川川川望望中川
月山辺月野野井月口鳥林林崎月月月川崎崎崎月月崎
秀治金上久今朝まつ七英伴喜忠さ小照と光信きん文
男一芳勇治作造茂雄雄雄三守治と花登男く功一子平

// //

一、一七四
二、一七一
一、一六九
一、一六六
二、一五二
一、一五一
一、八四三
一、〇八八
一、一六四
二、九五〇
一、八九三
一、一五五

二、一一七
三、一四八
二、三四八
二、三四八
二、三四八
二、六八二
二、六八五
一、一六三
二、六八二
二、九四三
二、九四三
一、九四三

望月	望月	望月	望月	望月	望月	望月	望月	望月	遠藤	山下	山下	山下	山下	山下	山邦	望月	望月			望月	望月
富次雄	クラヨ	力	正次	元市	仁司	武利	英雄	竹治	さた子	浅彦	喜元	浩己	登よ	弘	今朝雄	伴六	氏名	要	原地	ハル	実

八日住

// // // // // // // // // // // //

所

一、七二〇
一、六四五
一、五九二
一、五九三
一、五八三
一、五八七
一、五三一
一、五二八
一、四六七
一、五四〇
一、五四六
一、三七一
一、三七四
一、三七六
一、二七六
一、二七八
一、三五五
一、三六六
二、〇一一

二、八九九
二、九一二

橋爪智要	佐野ひさ子	佐野恒市	佐野吉治	佐野冬子	望月国子	望月清	飯田信一	佐野豊	高松広	佐田惣一郎	佐野亀二	佐田寅三郎	遠藤つね子	樋川英蔵	樋川美嘉	望月さだる	望月英二郎	望月いまま	遠藤光三	小林明治	望月豊春	望月幸一
------	-------	------	------	------	------	-----	------	-----	-----	-------	------	-------	-------	------	------	-------	-------	-------	------	------	------	------

// //

一、九八六
一、八七〇
一、八五一
一、八五一
四三五
四三六一
四三七
一、一三〇
一、一二七
一、八六六
二、三六二
二二七一
五八五
二二六
一、二六一
二四四
五〇四
三九七
一、一二四
一、一〇三
二二三
一六二
一九
五一五

佐野嘉一	佐田正一	佐田和也	松田開造	一宮武治	石田永城	若尾梅子	石田永知	佐田武	佐野きみ	若尾宗久	小林平八郎	佐田重	小林正	若尾カズコ	小林安定	佐田みさを	小林秀吉	佐野重治	佐野清一	佐野正雄	佐野美和	山下まつゑ
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

五七四	五五六	五四六	五四四—二	一四三	五四二	一六一	五三九	五三二	六一八	五二七	五二四	五三〇	五〇一	五二〇—三	一七九—一	五一九	五四四	一八〇	二〇七—一	五二八	一、二二五	四五〇—二
-----	-----	-----	-------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-------	-------	-----	-----	-----	-------	-----	-------	-------

樋川いぢ	西海松雄	望月由平	佐田金重	雨宮進	小林章作	山下善蔵	高松友吉	高松安義	榊原周雄	望月直栄	佐野完治	佐野稟三	佐野一男	若尾栄一	望月つゆ	若尾貞利	佐田要	佐田三男	田中幸昌	佐野喜俊	佐田敏雄	高松政男
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

六七七一	八〇—一	六五一	七一	六三八	五四三—一	六三七	六三六—二	六七	六三三	六二五	六二三	六九	六六一	六一九	六一六	六一九—一	六〇〇—一	五九七一	五九六—二	五六二	五六五	五七七	一一五
------	------	-----	----	-----	-------	-----	-------	----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-------	-------	------	-------	-----	-----	-----	-----

若宮文長	望月浜子	佐野勇	佐野和彦	黒田晴彦	佐野美彦	高木松雄	雨宮浜子	金岡秀夫	西宗直	佐野満	佐野喜久雄	望月民雄	望月富一	田中梅代	天野志津子	佐野朝治	佐野安市	雨宮直治	若尾光治	小林陸師	佐田ふみ江	佐田勝
〃	〃	〃	伊沼	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

一、一八四	一、一四〇	一、一七八	一、一四三	五四三—二	六六〇—二	一八〇	六七五—二	五八五	五二九	七〇〇	六一七	六七七	六七七	五五〇	六八九	六九五	六七四	六七五—二	八	五二四	六八〇	六七九
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-----	-------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-------	---	-----	-----	-----

世帯主名簿

望月良江 望月み江じ 佐田四郎 望月平八郎 清水いね子 佐野正康 村松定一 丸山軍造 佐野文平 川崎きくの 佐野忠治 佐野直造 佐野都夫 佐野金六 佐野豊 佐野八朗 佐野英雄 佐野幸雄 佐野司臣 佐野仙次 若宮喜一 佐野改造 佐野民造 若宮繁夫

〃 〃

一三八二 二五〇 三〇六 二八四 二八六―三 二八九 二九一 二九八 二九六 三二三 一、二五〇 一、一三三 一、〇五九 一、〇五八 一、一三八 一、〇三六 一、〇〇七 一、〇〇六 一、〇〇〇 九九八 九六〇 一、二二七 一、二二一 一、一八七

増田和一 望月きくえ 深沢藤太郎 深沢安平 若宮昭造 佐野文利 深沢武義 栗沢松実 深沢文雄 佐野真平 望月宗盛 深沢宗三 佐野宗正 望月倍枝 佐野正雄 佐野国義 村松寅延 佐野禄朗 深沢富造 佐野数哉 佐野和作 佐野勝秋

〃 〃

五九 一五 七九 七八 三〇五 一、二六七 七六 六六一 七一九 七三 七五 九五 八五一 八八 八七 七一二 七一二 一三五 一一九 一二二 一〇六 一〇七 一三七

増田文夫 大川守正 幡野恒夫 佐野タツエ 土橋きくゑ 佐野慶一 渡辺徳光 青嶋啓一郎 青嶋秀治 野村勇 望月光正 古屋政雄 古屋保 増田かね江 増田永次 増田信 佐野三男 平林弥太郎 深沢友一 佐野松代 佐野忠義 望月泰然 望月朝光

〃 〃

二〇二 二八二 二八一 一 四一―一 一四三 一、二八八 一〇九―一 九二 六七 一、四〇二 七九 四〇 一四 二二 一六 一二三 五 一 九八 八 二七 一九

// //

内 佐 深 近 古 望 望 木 神 伊 内 古 佐 土 佐 市 若 佐 古 土 佐 土 佐 佐
藤 野 沢 藤 屋 月 月 川 田 藤 田 屋 野 橋 野 川 尾 野 屋 橋 野 橋 野 野
公 房 新 茂 な 為 庄 源 信 英 よ 友 玉 敏 彦 春 まつ 音 とくの 章 兵 長
雄 代 力 一 政 を 勝 平 教 夫 文 志 春 作 夫 吉 子 子 一 強 八 馬 太郎

// //

望月 深月 若尾 若尾 青鹿 若尾 佐野 佐野 深松 惠美 佐野 麻生 佐野 深沢 石川 小林 望月 平林 古屋 長田 小坂 細沢 佐野
月 月 尾 尾 鹿 尾 野 野 松 美 野 生 野 沢 川 林 月 林 屋 田 坂 沢 野
勝 喜 信 俊 辰 武 藤 敏 作 是 本 和 ま 清 ゆき 八 義 重 美
満 夫 治 一 夫 夫 吉 雄 治 大 吉 樹 さ 孝 子 代 一 一 子

// //

世帶主名簿

遠藤源一	土橋忠治	土橋秀幸	土橋嘉幸	若尾武之	深沢恭一	土橋実蔵	平林錦正	望月錦光	川口勝美	岩柳嘉七郎	佐野嘉勇	岩柳嘉一郎	平林永雄	金田りん	土橋都通	深沢仁三郎	勝野玲	佐野賢	平林貞重	若尾国造	平林造平	小泉周平	佐野寛
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------	------	-------	------	------	------	-------	-----	-----	------	------	------	------	-----

// //

一、四四八
一、五一二
一、三九二
一、三九〇
一、三八四
一、三八三
一、三三九
一、三八一
一、三八〇—三
一、五一三
一、五一三
一、五一三
一、五一一
一、五一一
一、五〇七
一、五一一
一、五二一
一、四八五
一、四三一
一、六八四
一、六八五
一、三三七
一、三三三
一、六八六
一、三三二
一、六八四

井 平 望 佐 土 川 平 小 伊 望 岩 望 石 内 渡 若 望 渡 望 望 佐 相 土 佐
上 林 月 野 橋 手 林 林 藤 月 柳 月 川 藤 辺 尾 月 辺 月 月 野 川 橋 野
勇 　　　　とくよ 良 延 雄 正 つね子 金 克 鶴 悦 武 一 す 貴 喜 三 邦 安 要
三 泰 令 平 春 太 郎 治 孝 正 勇 雄 三 夫 夫 ぎ 夫 久 次 晴 雄 一 寛

// //

一、七九三二
一、七三一
一、七三三
一、六八二
一、七二二
一、六八四
一、七七一
一、七〇八
一、七〇八
一、六九八
一、三三〇
一、三四一
一、三四二
一、七〇九
一、三〇〇
一、六八一
一、八一九
一、七三八
一、八九二
一、七三三
一、七三一

山土大川早秋佐平押浅中平斎平松若望早樋遠望近河望
本橋滝口川山野林田井谷林藤林野尾月川川藤月藤住月
辰金光八千代高五玄織一茂定一真寿恵昌雄伝良男豊
造要房雄代徳郎明織一正一恵恵雄雄伝良男豊
造要房雄代徳郎明織一正一恵恵雄雄伝良男豊

// //

一、三九五
一、三一九一三
一、三一九一
一、三三八
一、三一七
一、三〇四
一、三〇三
一、七二七一
一、二九五
一、七九一
一、七四二
一、七四一
一、七四〇
一、七四五
一、七三三
一、二四五
一、二九六一
一、七七七
一、八四五
一、三九八
一、七六二
一、七六六
一、七七二
一、七五二

一、七五〇
一、三〇〇
一、三〇〇
一、七七一一
一、二九四一四
二、三五六
二、三八二
二、三八八
一、七五〇
一、七五五
一、八四七
一九八一
一、二八九
一、二九二一四
一、七九三
一、七九三
一、七九三
一、八一三
一、八一五
一、五一三
一、五一三一
二、三五五
一、二九一五
一、二九一五
一、七四一
二、三五五
二、三五八

二、三五五
二、三五五
一、二八八
一、三三五
一、二八五
一、二八四—三
一、二八六
二、三八三
二七四
一、二九一—
二、三六〇
二、三五七
一、二九一—四
一、三九六
一、二九一—六
一、二八六
一、三五七
二七四
一、一四五
一、一五五
一、一四二
一、二九一—七
三、三三三
一、二九二
二、三三三

江
原
所

一、九五〇
一、九〇九
一、六二二
一、九五〇
一、九八七

二、二九一
一、二九一
一、二九一
一、二九二
一、二八七
一、二九二
一、二八四
一、二七八
一、三〇〇
二、三九三
二、二四〇
一、七七七
二、四四〇
二、三六三
二、二四〇
二、二四〇
二、三三三

世帯主名簿

望吉深若望若望市若望伊若望若伊小若若若若若杉若若
月田沢林月林月川林月藤林月林兼藤松林林林林林山林林
文昌晏喜た理志房孝文正兼嘉一孝次英俊龜正き松
造靜訓育彦か義郎子良郎勇雄作子三孝次治彦男代志よ造

〃 〃

二、
一、九九九
〇四七一
一、二〇四六
二、〇五三
二、〇六八
二、〇七〇
二、〇七七
二、〇九五
一、四五四
一、六三四一
一、七八七
一、七八三二
二、〇三一
一、七六〇
一、七五七
二、〇二一
一、九七三
一、九七三
二、〇三一
一、九六五
一、九七七
一、七四五
一、五〇四
一、六二九

小若望上若若小若若若宮若若望若望若若若若若若
松林月田林林松林林林林林林林林林林林林林林林林
富忠孫裔明重淳一薫昌げ輔八重只はる四武正幹忠国幸
豐雄作二伴一子忠一薰昌げ輔八重只はる四武正幹忠国幸

〃 〃

一、
一、七五一
一、七三〇
一、七七七
一、七四五一
一、七五一
一、七四七
一、七四八
二、〇六五一
二、〇一四
二、〇五一
一、九九〇
二、〇二四
二、〇三〇
二、〇三三
二、〇三三
二、一三五
二、一四一
二、一四四
二、一四六
二、一四八
一、九七〇
一、七五八
二、〇四六

吉吉赤赤望望佐佐宮望望望近依若若依広若若若若深若若
田田井井月月野野沢月月藤藤田林林田瀬林林林林林林林林林林
令弘貞重桂宏判金乙一勇スミ一金一昭二実明野一さよの精一栄た治
枝靜人夫平太郎三明明太郎一三ミレ一吉二野一の一の栄子吉

〃 〃

一、
一、二二〇
一、二二七
一、三三九
一、三三一
一、三二四
一、一〇八
一、一〇七
二、三八八
二、三七六
二、三六七
二、三五六
一、七〇五
二、一七二
一、四五一
一、五〇二
一、六二八
一、六二五
一、七三四
一、七二二
一、七二四
一、六八〇
二、〇九五
一、七四四
一、七九四

小林次郎	小林りよ	小林善一	長沢やちよ	長沢正亨	上田正一郎	長沢東一郎	伊藤孝之	伊藤直樹	伊藤高祥	原田充	長沢公夫	長沢政一	長沢唯男	長沢誠	長沢正	宮沢伴三	伊藤福男	伊藤英雄	伊藤美津子	伊藤隆夫	伊藤聖樹
〃	〃	宮木	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

一、三九七	一、三九五	一、三九九	八六六	三九九	三七五	八六六	八六九	八七〇	八七一	八九九	四五九	八七九	八七八	八八四	八八六	八八七	一、一七一	一、二〇四	一、二〇一	一、二〇〇	一、一九五	一、三七七
-------	-------	-------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-------	-------	-------	-------	-------	-------

高野三男	高野久次	近藤喜登	野原勝義	近藤康則	近藤良一	小林金繁	望月新武	小林式雅	樋川孝一	望月金造	若林利雄	桐林高義	小林喜秋	小林伝一	小林武道	小林弘	小倉是温	小林英雄	小林正直	小林英一	小林正志
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

一、九〇六	一、八九八	一、八五四	一、九三四	八一五	一、五六八	一、五六九	一、五三七	一、五三七	一、五三七	一、五三七	一、五三七	一、五三七	一、五三七	一、五三七	一、五三七	一、五三七	一、五三七	一、五三七	一、五三七	一、五三七	一、五三七
-------	-------	-------	-------	-----	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

依田ふじゑ	望月ます恵	若林峯吉	小林慶治	佐野秀平	小野秀次	佐野よ志江	高野清	中野清	高野孝	佐野忠治	望月雄	望月雄	小林秋男	遠藤くま	高野今朝恵	高野力夫	内藤辰操	高野秀勝	高野勝	深沢一雄	青林久	青林利治	深沢守雄
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

二、〇〇三	二、〇五一	二、〇六一	二、〇五七	二、〇五四	二、〇四四	二、〇四六	二、〇三六	二、〇三二	六六四	六六一	六六〇	一、五六九	二、〇一八	二、〇七三	二、〇三二	一、九二六	九七五	一、八九〇	一、九三四	一、九六七	一、九六六	一、九一〇
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-----	-----	-----	-------	-------	-------	-------	-------	-----	-------	-------	-------	-------	-------

世帶主名簿

高	遠	近	近	高	近	遠	近	野	高	高	近	近	近	近	高	高	長	近	近	近	近	小	小
野	藤	藤	藤	野	藤	藤	藤	田	野	野	藤	藤	藤	藤	野	野	田	藤	藤	藤	藤	林	林
和	フ	武	精		恒	百	一	睦	国	登	宮	美	武	安	静	孝	た	た	た	た	正	義	義
義	ク	夫	一	要	博	由	雄	男	真	光	志	津	一	次	子	造	み	進	進	進	勇	雄	陳
	ヨ																						
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

八五〇	七四七	七二二	七二二	七五二	七二〇	七二一	七八	四八三	九二一	四八八	五一七	四九〇	六七五	二七〇	五〇七	四九二	四七五	七五三	四六七	四六六	二二五	二二三	二〇五	一、四六一
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-------

高	青	中	小	若	若	篠	村	望	若	依	若	依	望	若	若	高	望	高	田	高	近	
野	林	込	林	林	林	原	松	月	林	田	林	田	月	林	林	野	月	野	中	野	藤	
	勝	国	宗	勝	次	じ	寛	一	政	は	竹	民	貞	宗	義	博	武	勝	春	律	静	
茂	利	彦	一	三	男	宇	治	男	次	ま	男	十	一	志	一	光	夫	男	子	子	美	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

四七五	四七七	九一	一、三七二	一、〇三八	一、〇三三	一、〇〇六	九五五	四五五	四四〇	四一八	三八三	三八六	一、〇八八	三八二	九四九	八八一	八八三	八三三	七六四	八四八	八二五
-----	-----	----	-------	-------	-------	-------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

あとがき

編集委員長 若林 武

自治法が改正されてすでに二十年余、町村合併後の各町村誌は県下半数以上のところすでに発刊され、もしくは計画されている現状で、その性格上だいたい一定の型があるが、そうしたイージーオーダー的でなく、オリジナルなものと試みたが、結果的にはやはり定型的なものになったと思われる。

ただ内容的な特質としてあげられることは、編集委員がほとんど現場の教師群であり、それにこれまで町内にあって教育文化等に深い関係のある学識経験者の参加を得たことで、各分担部門の執筆はもちろん、修文・校正・写真・扉画等まで協力しあって完成したことである。

次にできるかぎり正確、妥当を期するため、いくたびか資料の前に腕をこまねき夜を徹したことである。そのために一か年余で完成という町長の希望があつたにもかかわらず、ついつい二年半にわたってしまったのであるが、この間「平須遺跡」の発掘作業では、四千年前の祖先のいぶきに接し、その他貴重な文化財や文献、写真等を世に出すことができ、思わぬ収穫のあつたことは、二か年余の歳月が決して無駄骨ではなかったと自認しているのである。

着手から完成までの経過については詳しい記録を添付するが、昭和四四年度当初の町議会で「町誌編さん室」設置の条例が決定され

たので、直ちに四月一日付けで人事配置があり、室長には総務課長の深沢幸一が議会事務局長兼務で発令され、直接関係する係長には、企画室で公報等の編集経験をもつ佐野三郎が専任で発令され、従来の住民相談室を編集の城として、一月ごろからトップ段階で計画されていたこの大事業が本格的にすべり出したのである。

なお編集委員の星野一俊氏(当時静川小学校長)が中途、病魔で倒れ、遂に他界されたことはかえすがえすも残念であり、その分担の「政治」編を「町の歴史」「町の行政」編に分けて、各担当委員と事務局が中心となって執筆し、両編に掲載したのであるが、はじめから意欲的にこの計画に賛同され、協力を惜しまなかった先生の霊に、いま完成した町誌を捧げ、心よりご冥福をお祈りする次第である。

編さん経過

この町誌は町制施行一五周年記念事業の一つとして計画されたもので、笠井清巳町長から指示があり、近町の状況等も調査した結果、これが具体化するにいたったのは前述のように四月一日からで、昭和四五年の文化の日を目標として完成することになり、若林武助役を総括責任者として計画を進め、次のような大綱を決定した。

一、組 織

- (1) 編さん委員会
会長(町長) 副会長(議長、助役)
- (2) 編集委員会
内容別に、町内有識者を委嘱して構成する。

(3) 事務局

町誌編さん係長を中心に、必要によって臨時職員を充当する

(4) 協力員

資料の提供その他編集内容を充実させるため、各区長をはじめ有識者を委嘱する。

二、体裁

A5版、函入、8ポ二段たて組、本文千五百ページ内外

三、内容

- (1) 中富町発足後の町勢を広い角度からとりまとめるが、本町の歴史的段階を正しく記述するため、町内外の文献資料により先人の足跡をたずね、その文化遺産を系統的にあげていく。
(2) 写真、図版等は有効に挿入し記述はつとめてやわらか味を出すようにする。

- (3) 引用した資料を別印刷して刊行することは別途考える。

以上の大綱を基本にすべり出した編集の仕事は、時に快調に進み、また、時に重畳たる山坂をあえぎながら登り、ようやくきょう陽の目をみたのであるが、ここに編集日誌から一部を抜すいしてみることにする。

昭和44・4・4 町誌編さん室の設営

〃・〃・8 編さん会長、副会長と事務局との打ち合わせ

〃・〃・26 編集委員委嘱式 執筆部門の決定

総説 若林 武

地誌 渡辺 熊雄

町の歴史 依田 明

政治 星野 一俊
町の行政 神宮司 諤

産業と経済 深沢 幸一

教育 佐野 三郎

文化 望月 教三

土木・交通 筈井 方夫

治安と消防 若尾 武雄

山 山中 孝雄

依田 正行

依田 明

渡辺 熊雄

佐野 三郎

一宮 信夫

厚生と衛生 史蹟・名勝・天然記念物・文化財

口碑と伝説 若林 宗志

宗教と民間信仰 大倉 貢

官公庁 依田 明

挿画・見返図 野田 宜安

修文 星野 和之

〃・5・17 編集委員会 筈井慶太郎

〃・5・17 編集委員会 望月 喜彦

〃・5・17 編集委員会 若林 武

〃・5・17 編集委員会 依田 明

〃・5・17 編集委員会 望月 教三

昭和45	昭和45	〃・3・31	埋蔵文化財報告書完了
2・18	2・18	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
12・10	12・10	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
11・26	11・26	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
11・25	11・25	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
11・23	11・23	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
11・22	11・22	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
11・19	11・19	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・19	7・19	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・30	7・30	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
8・11	8・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
8・19	8・19	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
9・9	9・9	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	各部門の研究交流・装丁に関する検討
7・11	7・11	〃・3・11	

昭和46	昭	町	誌	編	さん	だ	より	」	印	刷	(各	戸	配	布)	〃	・	4	・	6					
1	27	各	部	門	の	研	究	交	流・	装	丁	に	つ	いて	検	討	〃	・	7	・	4			
30	30	予	約	募	集	の	た	め	の	「内	容	見	本」	の	検	討	〃	・	9	・	30			
		西	島	神	楽	を	中	心	に	郷	土	研	究	(講	師	佐	藤	森	三)	〃	・	10	・	20
		「町	誌	内	容	見	本」	印	刷	完	了									〃	・	12	・	18
		区	長	会	(協	力	員)	に	予	約	募	集	依	頼						〃	・	12	・	21
		区	長	会	に	内	容	の	説	明	と	予	約	の	依	頼				〃	・	1	・	30
		修	文	作	業	に	は	い	る										〃	・	2	・	27	
		原	稿	読	み	合	わ	せ	会	(一	泊	二	日)						〃	・	3	・	15	
		サ	ン	ニ	チ	印	刷	と	契	約	(一、	五〇〇	部)						〃	・	4	・	30	
		第	三	回	原	稿	読	み	合	わ	せ	会							〃	・	5	・	20	
		航	空	写	真	入	手												〃	・	5	・	30	
		原	稿	整	理	完	了												〃	・	6	・	3	
		町	誌	原	稿	持	込												〃	・	8	・	1	
		町	誌	原	稿	校	正	開	始										〃	・	11	・	10	
		町	誌	原	稿	校	正	終	了										〃	・	11	・	25	
		町	誌	印	刷	完	了												〃	・	12	・	1	
		町	誌	発	行																			

以上のように本書は、その計画の当初からすれば二か年有余の日
子をかけ、郷土の各方面にわたって資料を網羅した。本書は本町小・
中学校の社会科学学習の郷土辞典ともいふべき内容をもっていると自
負している。

人の意識も行動もどんどん変わっていく。そして環境も生活様式
も変わる。そうした時の流れの中で、いまこの町誌を世に出すに当



町誌編集委員および編さん室員

たり常に大所高所より方向づけを出していた編さん委員会、調査や研究、原稿整理と、公務や家業の間を縫って終始がんばってくださった執筆陣、あれこれと資料提供をはじめ予約申し込みの雑務まで面倒みていただいた区長さん方、まことにうれしいご支援ご協力であった。

なお、編集記録に記載のように、本県郷土研究の重鎮である村松志孝先生、佐藤森三先生、青山靖先生、山本寿々雄先生が、いろいろの機会を通じて、本書の内容の肉付けをしてくださったことは、編集委員が執筆するにあたって勇氣と自信を持つ原動力ともなり、感謝にたえない。

「断絶」「孤独」「疎外」など、灰色のことばが日常会話にまで定着し、いわゆる人間性の回復が叫ばれてきた今日、この町誌は人間への愛情から生まれた人間ドラマでもある。私たちは自からの手でつくり上げたこの歴史の上に立って、過去を知り未来に役立たせようとするものである。

なお、装丁にあたって巻頭題字の仕切紙は、西島手すぎ和紙工業組合長笠井成高が、伝統を誇る手すぎ和紙の「美と柔と和」の味を十分いかした上質紙をご寄贈くださったもので、厚くお礼申し上げます次第である。

町誌編さん委員会名簿

(1)

町誌編さん委員長

副会長

〃 〃 〃

笠井清巳
遠藤正一
野中正平

町誌編さん委員会副会長

町誌編さん委員会委員長

(2)

町誌編さん委員会委員長

町誌編さん委員会委員長

町誌編さん委員会委員長

町誌編さん委員会委員長

町誌編さん委員会委員長

町誌編さん委員会委員長

町誌編さん委員会委員長

町誌編さん委員会委員長

町誌編さん委員会委員長

町誌編さん委員会委員長

町誌編さん委員会委員長

町誌編さん委員会委員長

町誌編さん委員会委員長

町誌編さん委員会委員長

町誌編さん委員会委員長

町誌編さん委員会委員長

町誌編さん委員会委員長

町誌編さん委員会委員長

町誌編さん委員会委員長

町誌編さん委員会委員長

町誌編さん委員会委員長

町誌編さん委員会委員長

町誌編さん委員会委員長

町誌編さん委員会委員長

町誌編さん委員会委員長

町誌編さん委員会委員長

町誌編さん委員会委員長

町誌編さん委員会委員長

(3)

町誌編さん協力員

連絡主任

学識経験者

学識経験者

学識経験者

学識経験者

学識経験者

学識経験者

(編集委員の順序は担当編の順序による)

望月芳満 若林武 若林武 渡辺熊 依田明 星野一 神宮司 望月教 望月三 笠井方 笠井方 若尾武 山中孝 依田正 依田正 一宮信 若林宗 大倉貢 野田宜 星野和 笠井慶 望月喜彦

教育委員・文化財審議委員・各種団体長・役場課長・係長その他の学識経験者

(4)

町誌編さん事務局

室長(兼務)

係長(専任)

係員(臨時)

深沢幸一 佐野三郎 山下美千子

県政功績団体として表彰される

一六〇〇ページにおよぶ町誌の草稿をいま静かに閉じようとしているとき、私どもにとつて思いがけない喜びの日を迎えた。

昭和四十六年一〇月一四日、県政功績団体として県下六四市町村から、ただ一町、中富町が選ばれて晴れの表彰を受けたのである。

地域を愛し、わが勤めを愛する笠井清巳町長の根性とアイディアの火花は、ここにその光彩をはなち、いよいよ強い決意と地域に密着した施策が約束されることであらう。

思えば、昭和二十九年本町発足以来満一七年、先人の英知と勇氣と献身に学びつつ、新しい決意をもって自治百年の大計を確立、推進せんとするとき、本誌の末尾を飾るには最もふさわしい事項と思ひ、当日の表彰名簿の原文を抜すいし、掲載して、その喜びをともにしたいと思う。

抜すい

団体・地方自治

団体名 中富町

所在地 南巨摩郡中富町切石四一六

団体長名 笠井清巳

沿革

昭二九・八 西島村、大須成村、静川村、曙村が合併して中富

町となる。

昭三〇・四 原村を編入合併する。

昭三一・一 鵜沢町十谷の一部を編入する。

昭三三・四 下部町宮木、下田原区を編入する。

功績

昭和二九年新町発足以来、産業基盤としての道路整備事業をはじめ隣接町村との共同による、し尿処理施設、ごみ処理施設、火葬場の設置および、飯富病院の建設ならびに簡易水道の設置、地方病撲滅溝渠の建設、生活改善センターの建設等住民の生活環境の整備について積極的に取り組んでいる。また、若い人達の町内定着と定住人口の増加を図るため「繁栄条例」を制定し過疎対策について努力するとともに養蚕、酪農、和紙製造など地場産業の振興と住民福祉の向上のため全町一丸となって努力している功績は顕著である。

ここに本誌の完成をみるにあたり、事務担当課としての編さん室の長期にわたる労を多とし、町内小中学校の先生がたの校正についてのご苦勞に感謝するとともに、終始うちとけて相談に乗ってくださったサンニチ印刷のご協力に対し深く敬意を表する次第である。

昭和四六年十一月

中富町誌

昭和四十六年十一月二十五日 印刷
昭和四十六年十二月一日 発行

〔非売品〕

編集兼 中富町誌編集委員会
発行人

印刷所 株式会社 サンニチ印刷

甲府市北口二丁目六

発行所 中富町役場

山梨県南巨摩郡中富町切石

